



吉原

軒

後編

134

特子
864

1	11	12	13	14
2	21	22	23	24
3	31	32	33	34
4	41	42	43	44
5	51	52	53	54
6	61	62	63	64
7	71	72	73	74
8	81	82	83	84
9	91	92	93	94
10	101	102	103	104
11	111	112	113	114
12	121	122	123	124
13	131	132	133	134
14	141	142	143	144
15	151	152	153	154
16	161	162	163	164
17	171	172	173	174
18	181	182	183	184
19	191	192	193	194
20	201	202	203	204





長谷川
三郎
画

吉原百人斬後編

第一回

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

さても佐野屋治郎左衛門は、翌日より相變らず、萬屋へ出掛
 けて参りまして、其度毎には取巻きの銘々を招いて、彼の八
 ツ橋に招聘をかけます、大に阿波太夫も迷惑をしながら、何
 でも取れる丈は絞つてやらうと、八ツ橋の許へ参つて、只か
 座敷の勤め許りを頼みます、實に八ツ橋も五月蠅は思ひま
 するが、蝶無く出掛けて参り勤めて居ります其内に八ツ橋も
 熟々が者へましましたのは、何を云にも高の知れた田舎大盛、金子

の無心の一つも言ッてやれば、驚いて定めて来まいと考へま
 したが、或日治郎左衛門に向ひまして、「大盛、妾は主に少
 し無心がありんすが、何んぞ聞いて呉んあますか」「ハイ々
 々、何んの御無心だ、身に叶ッたとなれば前のとゆゑ何ん
 でも聞きませう」「夫は有難うさます何うかお金子を二百兩
 貸して呉んあまし、ね小遣にしたいんでありますから」「ハ
 、、何んだと思へばッた二百兩、ヤッ承知しました」と
 後とも言はず、懐中の胴巻より取出して、八ッ橋の前へ差出
 しました、八ッ橋も心の中には大に驚きましたか」「有難う
 さます」と其の金子を受け取めまして夫から後は三日にあげ
 す、或は百兩又は二百兩と、無心を吹掛けまする度毎に、決
 して治郎左衛門は後へは寄りません、彼が言ふなり次第貸し
 て遣ります、其内に五六回目からやうくのとで皆者に案内

をされました、彼の萬字樓へ出掛ける云ふとに相成りまし
 たが、只派手な散財ばかりにて、ね床入と云ふ様なとは決し
 て無く、遂にさう斯う爲る内に八月も経ち早九月十三日と成
 りましたが、治郎左衛門は阿波太夫に向ひまして、「オィ阿
 波さん、ね前は最初何んと言つた、華魁と云ふものは、一應
 や二應で、得心をしな、是あら容にして見やう、又大盛に
 成遂せて見やうと云、互に氣が投合てから得心を爲ものだか
 ら、當分はお通ひなさるが宜しからうと、言つたが乃公今日
 迄何にも言はないが、八月の朔日から今日は九月の十三日だ
 又華魁も乃公を容にして見やうと云ふ了簡が無かつたら、正
 敷無心も言まい、華魁が無心を言ふ其度毎に決して不賭と言
 たとは無い、貸てやつた金子も凡二三千兩もあるよ、併し尙
 華魁が私の氣心が判ら無いので抱癖が出来ぬものか、是から

何年計り運ふと華魁が得心を爲るか、更めて今日は前四に其
 とを聞いて置きたいんだ」阿波太夫も大に体裁悪く頭を掻き
 ながら、是は何うも旦那様恐れ入りました、全体華魁は最
 疾より貴公に種々な無心を吹掛けますから、最早得心をして
 居ると心得て居ました、こりや何うも済みません、エー
 ちやア私が一應確と華魁へ掛合て見ませうと聽て八ッ橋の部
 屋へ来りまして、阿華魁、何うも斯うなりませと金子の義理
 が加つて来ましてね、私は佐野屋の大盡へ申譯がございませ
 ん、あなたも氣に入らなければ、怒ひ生中無心を言はないが宜
 しい、金子はさんぐ借り返んで、今日が日迄お座敷の勤め
 ばかりでは、餘り太いちやございませんか、大盡に催促され
 て見ると、私も最う嘘の吐きやうがございませんか、何うな
 さる思召でございます」と云はれて八ッ橋も大に困りました

が成程最初は化物と心得まして、ワナク隈へて居りました
 が、モウ度々の無心をして見ると、金子の義理で得心をしな
 いと云ふ譯には参りません、只座敷の勤ばかりでも、治郎左
 衛門は心能く、無心を聞いて呉れますから、此上は寧ろ客にし
 たから、思ふ存分金子も取れるであらうと、是に至てやうや
 う八ッ橋の得心を致しましたのは、九月十三日のとでござい
 ます、阿波太夫は大に歡び、早速治郎左衛門に話込みました
 「何うか今宵は華魁が承知を致しまして、併し夫々取巻の御
 祝儀、又は成丈け貴郎も派手に床入りが宜しうございます
 、萬事は斯様く……」と阿波太夫の指揮に依て其夜一晚
 の入用が、凡五百三十兩ばかりも要りまして、遂に八ッ橋は
 佐野屋の心に従ひまするとに相成りました、治郎左衛門は兼
 ての望を遂げまして、宛ながら此の節は夢中に相成り、八
 五

橋の許へ通詰めて居ります、所が八ッ橋も是迄とは違ひ、度々無心を吹掛けますが治郎左衛門も其度毎に當人の望みに任しまして、金銀を宛がら湯水の如く遣ひ捨てます、何れも八ッ橋に金子の要るとあるかど云ふに、兼て其身に間夫がありまして、此者は以前公儀の御能役者でございまして、寶生榮之丞と申します、此者は八ッ橋が未だ華魁にならぬ前、前通うて居りまして、八ッ橋も勤氣離れて誠實を明し、寶生榮之丞とは末は夫婦にでもなりたいと云ふ八ッ橋の望でございまして、他のお客とは餘程待遇も違ひます、依て寶生榮之丞も夢中と成て是迄に、度々通ひ詰めて居りましたが遂に是が爲に其身の放蕩も募り、御能師の内でも上役の方々に此とが聞まして、本人の身持放蕩の廉を以ちまして、終に長閑と相成りました、寶生も今更如何とも其身の致方もつ

かず據無く當地を出立致しまして、一先づ上方へ赴て身の治まりをつけたいと云ふ考でございまして、今生の暇乞と思ひました、或時彼の萬字樓へ出掛けて参まして八ッ橋に面會を致し、此度其身の浪人と相成ました次第を具に物語りまして、是迄は私も身分不相應ある遊びを致して斯かる今の身の上と成つて見れば致方も無し、一先づは當地を出立致し上方へ罷り越し、我身の治り方をつけたい、シテ見れば前に會ふも最う是が一生の別れとなるかも知難い、と惜々と致して話込みますると、八ッ橋も大に驚きまして、八「何も主が浪人をするなましたからと言つて、其様に遠方へ行くにも及ばないんさます、此上からは何事も、御不自由がちでもありませうが、何うか主の身躰は妾に任して呉んなまし」と萬事八ッ橋が引附けまして、新造左橋船橋にも相談の上、やうく田町の片

邊へ、一軒の家を借りまして、此所へ養生を入置きまして、
總てのとは八ッ橋より貽を致しまして、折々は萬字樓へ忍ん
で参りまするに致し、今では養生も萬事八ッ橋の厄介で
さいます、是に由て八ッ橋も此方へ多くの金子も引けます
、其金子の出所は、皆んち治郎左衛門の懐中が的でございます
して、此度佐野屋を客に致しましたるとも、今では吉原中の
大評判と相成り、華魁の八ッ橋は、中々の手取りだ彼の様な
恐しい化物を、得心して客に爲るのも問夫の榮之丞のあるゆ
ゑと、孰れも噂をして居りました、養生榮之丞は一向左様な
とは氣附ずに居りますと、是に榮之丞の住居をして居ります
る長屋内には、孰れも吉原の無頼漢連中が數多住んで居りま
して、折々は榮之丞を釣出して、賭博の方へ導きまするが、
人間も善いとは覺ぬにくだいものでございまして、悪い途には

染み易く、養生も今は此方の途へ引入られました、日々賭
博致して遊んで居ります、所が或日のとでございましてが
、當長家の巳之吉と云ふ無頼漢でございまして、戸外から宅内
を覗き込みまして、巳、オイ榮さんお在宅かい、榮、ヤア是は巳
之さんですか、サアお這入り、大層此節は賭場も盛んで居る
ねへ、何うだ工面は宜しいかい、巳、所が榮さん不可ないんだ
、昨夜スツかり取られて仕舞って、大に困って居るんだ、ね
氣の毒だがねへ榮さん一寸十兩ばかり貸して呉れないか、
オイ、冗談言ッちや不可ないよ、何んで乃公が其様に金
子を持つて居るんだ、知ッての通り華魁から、僅な小遣を貰
ッて居るんだ、十兩なんてエな滅法界なを言ッたら困るよ
、巳、榮さん、ね前さん何かへ、華魁から僅かな小遣位を貰ッ
て、夫で黙ッて居るのかい、ハッハッ此節華魁はね、大層お

勢力だよ、マア少なくともお前さんから、一寸の無心が百兩二百兩と云ったって、華魁は直と承知をして金子を出すのが出来から、ドツチャリ無心を言ふが宜いやね、何故で……己「何故と言ったって此節華魁の勢を知らないか、野州の佐野から出掛けて来る化物大盡、其者を客にしたものだから、中華魁の手許には、大變な金子が落ちるんだ、だからね、お前さんから殺等無心と言つても謂はゞ華魁は金子の口入同様なものだ、決して懐の痛む譯ぢや無し、ドツチャリ無心を吹掛けて、乃公にも少し宛貸して呉れるが宜いやア「へーぢやア何かエ八ッ橋はさう云ふ客を取り居るのかい」日「さうよ」宜し、夫ぢや乃公が一つドツチャリと無心を吹掛けて見やう」と早々支度を致し吉原へ出掛けて参りました、

聴て養生榮之函は、彼の萬字樓に來り八ッ橋の部屋へ通りま

すど「オヤ榮さんかへ、何か急な御用があつて來なされたか、華魁、他ぢやアねへんだ、少しばかりお小遣を借りに來たんだ、ア「アヤマア榮さん、一昨日五兩持たして遣たんだや無いか、馬鹿を言へ、五兩や十兩の端額金子ぢや不可ないんだ、賭博の資金に一寸百兩ばかり借して呉んねへ、八ッ橋は呆れました、榮之函の顔を眺めて居りましたが、八「榮さん、お前は大金を大變人が悪く成つたね、何んだって妾が百兩と云ふ様な大金を出さんだよ、當前サ、百兩が二百兩であるうども、手前の懐中が少々も痛むんぢやあるめへ、佐野屋の化物大盡にさう言つて借りて呉んな、手前が言ふとが出來なくば、乃公が化に會つて然う言はうか、八「オヤ誰から聞きなすつたねへ、聞かぬへもあるものか、吉原中の大評判、相手は二拾万兩に近い身代、其大盡を手前が客とし

て見りやア、幾何無心を吹掛けても、構ふとはあるゆへ、
榮さん成程お前はんに然う言はれて見りや、妾も何んとも言
ひやうは無いがねへ、行々はお前はんの爲だと思つてね顔を見
りや恐らしい化物、其大尽にお前ゆゑに得心をして居るのも
年が明いた曉にや、二人が何か渡世の資本の金子でも貯へて
置きたいと思つてのどサ、だからお前はんも餘り無法に金子
をお遣ひで無いよ、ぢやアア今日は是丈け持てお歸り」と
金子を五十兩ばかり出して渡しました、養生榮之丞も心の中
で大に歡びました、遂には此金を持って歸ります、時々賭
博の方へ手を出しまして、其後は三日にあげず無心でござい
ますから、八ッ橋も幾等治郎左衛門から取りまして、斯様
な脱道がございまして、中々金子と云ふものは澤山貯らない
ものでございませす、佐野屋治郎左衛門は素より承知の上通ひ

詰めて居りました、早や十月二十日と相成りました、最
八ッ橋の心底も大方見へまして此位なら身受をしても宜から
うと、萬字樓の二階座敷にて、大勢を相手に酒宴を致しな
ら、今日は少し治郎左衛門は眞面目になりまして、八ッ橋に
向ひ、治郎左衛門此間前の話では、何うか妾の身は一日
も早く、主治郎左衛門に身受けをして戴きたいんがませす、早く吉原を離
れて主の故郷へ行きたいと行つたのはよもや偽りでもあるま
い、己もかうして日々通ひ詰めて居れば渡世の方には手もつ
かず、寧ろ今日は當家の主人に談じ込み、お前の身軀を身受け
しやうと思ふ、元來ならば葛屋の方から話し込ませるのが當
り前だが、其様な迂遠いをして居ても面倒、葛屋へは後で
夫丈けの謝金を遣れば宜い、曰が直々に當家の亭主に相談して
見るが、お前は速背はあるまいねへ」八ッ橋之ハッヒ心中に

驚きまされたが、まさか可厭とも言はれませす。十四 夫は眞個でございませすか、大尽有難うござます、さうなる時は妾も生涯の身の治り、何うかさうして呉んあまし。治 夫ぢやあれた前から一寸内証へ行て、重兵衛を此所へ呼んで来て呉んな。八 アイ、ど八ッ橋は其場を起ちまして、自分の部屋へ来りまして、直様一通の手紙を認め、是を文使ひに渡し、養生榮之丞を呼び寄せるに致しました、其上内証へ出掛けました、樓主重兵衛に對かひまして、八 親方さん大變なことが出来たんござますよ。重 何んだ華魁。八 他ぢやア無いんでありませすかね、佐野屋の大尽が妾の身牀を身受け爲ると云ふんござます、若しや其様なことが出来ましたら、さうせ妾は生命が無いんござます、縦へ大尽が如何やうに言これやうども、何うか此身受けの出来な様にして呉んなましと、涙に暮れながら此を話込みました。

重兵衛も夫は大變と少し途方に暮れて居ります、所が養生榮之丞は、八ッ橋よりの手紙を見ると直と駈附け来りまして、今日は遠慮無く内証へメツと通りまして、八ッ橋に向ひ華魁今手紙だつたか、何うしたんだ。八 オヤ榮さんかへ、實は親方にお願ひ申して居る次第、何うか身受けを斷つて呉んなましと頼んで居たんござます。榮之丞は其場へドツカリ座りまされたが、八ッ橋親方、れ久しくお目に懸りません、チヨイと參つては居りますが、公然だつて登れる身分ぢや無いから、今迄は差控へても居りましたが、御存じの通り私も、以前公儀の御抱の時分は、随分華魁に掛つて時々の流連、其上此榮之丞の身代は、悉くお前さんの宅へ注込んで仕舞つたんだ、夫が爲に今では浪人、遂に華魁の厄介者と成つて居ります、聞けば佐野屋の化物が、身受けをしやうと云ふ今日の

次第、若しやお前さんが得心の上、華魁の身躰を佐野屋の手
 許へお渡しに成る時にあつ、此祭之丞の面もたふす、何うか親
 方、こいつア一番相談にならないやう、お取計ひを願ひたい
 んです、お前さんの心一つで、如何様とも成る話だが親方何
 んなものでございませう」と血相變て問詰めました
 重兵衛も暫く考へて居りました、然う言はれて見れ
 ば満更入ッ橋を手放す譯にも行きませぬ、と言つて先方も
 金銀づくで如何様にも成る話しと、掛合方の都合に依りやア強
 て厭でも言はれない、マア、何うか程能く斷つて見ませう
 よ、併し榮さん、私も少し心配だが、何うすりや宜らう
 そりや親方、何う斯はありませぬ、先方は金満家と言つたッ
 て、大体相場のあるものだと、先方から出掛けませう、そい
 つをれ前さんがたどへ口の方張らうとも、身受けの金子は減

法界高く吹掛けて遣る時にや、よもや夫を得心とは言ひませ
 ない、だから減法界に何うか高く話込んで貰ひたいのでござ
 います、重イヤ宜しい、一つ旦那に言つて見ませうと、重兵衛
 は羽織を引掛け、二階座敷へ出掛けて参りました、治郎左衛
 門は夫と見るより、治オ、御亭主サア何うか此方へ……ア華魁
 から委細のとは聞いてお呉んなすつたか、重へ一有難うござい
 ます、エ、何うやら八ッ橋が御意に叶ましたか、身受をして
 遣うとの御話、本人も大層喜んでございませぬ、何分何かお話
 の纏りまする様願ひたいものでございまして……治、其事
 でお前さんを呼に遣ましたが、元來私から斯様な事を言無ッて
 も、葛屋の方から萬事話込んで呉れるであらうとは思ひませぬが、
 夫では中へ人が這入ッて見れば迂遠い、ア、葛屋へは又私の
 方から夫丈けに心附けも遣る積り、今日はお前さんへ直々に

手取り早く話をしたいんだが、八ッ橋の身受は大體何程にて
 さして呉ますか、夫が聞きたい。重へー、誠に大盛へ斯様な
 とは申し上兼ますが、御存の通り、彼女は當年十九でござい
 ます、是から三四年と私宅の金箱でございまして、随分是迄に
 彼れ丈けの華魁に仕込まうと思ひますれば、諸君の申すに及ば
 ず、餘程彼の華魁には金子が掛つてありますし、何うも申
 し兼ますが、一ト通りの華魁とは違ひまして、滅法界に金子
 が掛つてござりまする……治「オイ、同じとばかり言つたッ
 て仕方が無い、そりや判つて居る、高いと言つたッて大體相
 場のあるもの、全體何の位なんだよ。重へー、夫がサア誠に申
 兼ましたが、滅法界高いのでございまして……治「困るなア、
 高い高いッて、火の見櫓ぢやあるまいし、高いくッて、幾
 等なち幾等と言つて呉無ちや困るぢやないか。重へー……と」言ひ

ながら暫時考て居りましたが、元來此重兵衛と云ふ男は、氣
 の小さな男でございまして、治郎左衛門から大體相場のある
 ものと言れて見とまさか、滅法界なとも言ません、心の中で
 考へましたは、金子の千圓も出して貰へば結構とは思ひます
 が、そいつを一番法を外して、二千圓と言つて遣つたら、定
 めて驚くであらうと、斯う考へを附けまして、モロくしな
 がら重へー其何んでございます、身受けは、申し兼ました
 が二……二……二千圓でございまして、治「ハッハッハッ、二千圓か
 私、は又滅法界高いと云ふから何の位か知らんと思つたが、
 二千圓、ヤッ價値があります、彼の位な全盛の華魁なら、夫
 りや其位出すのは業より覺悟、ぢやア、斯うしませう、一寸
 手紙を一通書きまして、通り二丁目の店へ持たして遣れば、
 直に番頭が金子を首に掛けて出掛ける筈だから、直と今日に

婿を明けませう、一寸硯箱を借してお呉れ、
 難うございませう、其何んでございまして、身受は先二千
 圓、所が是迄華魁の貴郎から度々小遣を貰って居ります
 のに、太い旦那の前で申し悪うございませう、何に使って
 仕舞ますか、大風に灰を撒た様にパツパツと、使捨てまして
 其上何に限らず手當り次第に物を借まして、トソと拂を致し
 ません、夫ゆる大分華魁の身には借金がございませう、一寸
 聞きましてたら呉服屋の拂ひが何んでも三百八十兩はございま
 する様子、小間物屋にも四五兩も借があつて、日々使ます
 る紙は紙屋を大分借倒てございませう、貸本屋の拂が十兩餘
 り菓子屋に五兩程、蕎麥屋に四五兩、汁粉屋に少しありまし
 て、私に一寸親方十兩、又は五兩一寸三兩、又は二兩一兩と
 …… 困るねへ、お前さんの様に然うエタ〜と

小細を言はれたら全体其様な借りを残らず集めると、幾等ば
 かりになるんだ、平へ一皆合算したら五百兩計りは大丈夫で
 ございませう、成程、夫から引祝ひと云ふものは、大体何の位掛か
 りますか、一さうでございませう、是も立派に致しませうと二三
 百兩も掛かりませうと思ひませう、夫では身受けと借財引祝と
 合して見れば二千七八百兩だ、左様でございませう、宜し
 い、ぢやア三千兩か前に渡しますから、夫で何うか話を定て下さ
 る様直と宅へ手紙を持たしてやつたら、金子の直に持て来るで
 あらう、重へ一夫は何うも有難うございませうと早々其揚を立
 ちまして自分の部間へ歸つて参りました、
 先刻より樂之丞八ッ橋は容子如何にと待つて居りましたが、
 「親方何う話がなりましたか」重兵衛は頭を掻きながら「
 榮さん、困るんだよ、何うやら断はらうと思つた奴が、話が旨

と云ふ譯にもならぬ、マア話を定て来た様などで……
 「そいつア不可ねへ、華魁、此上は手前が二階へ行て、ね化
 にさう言ッて是迄隠して居たが已と云ふ亭主があるに依て、
 妾の身牀は百万兩の金子を積んでも、身受は出来ないて言ッ
 断ッて仕舞へ、其上兎や角う吐しや、已が行ッて直々に断ッ
 て来やうから」ハッ橋は致方無く「マア短氣な心を起さない
 で妾にお任せしよと」二階へ上ッて参りましたが、治郎左衛門の
 傍に座りまして「大尽誠に主に濟ないとが出来たんざます、
 是迄は主に隠して居ました何が包みませう、實は妾には
 悪い虫が附いて居るんざます、年の明いた曉には、夫婦にな
 らうと約束をした亭主があるんざますから、何うか此身受け
 ばかりの堪忍して呉んなまし」治「エーッ……夫ぢや華魁是迄言ッ
 たの皆伴りか」ハ「サア主に濟まない譯でありんすが、勤めの

く纏つたんだ「へー、身受の金子は何程と仰しやッたんです
 「サア其所だッて、高い」と言ッて居ると、大尽の仰しや
 るには、高いと言ッても大体夫は相場のあるものと、言はれ
 て見れば滿更滅法界なとも言はれない、夫で二千兩と言ッたん
 だよ「へー二千兩……、親方、ね前さんも是丈の家選を擲いて
 居て、向ふ前の見ぬない人ですなへ、私の様な此様な虫が附い
 て居ないでも、彼れ丈に登り詰めて居る化物に、二千兩どの
 何のとです、そりや先のが安いと云ふのは當り前でせう「サ
 ア夫で私も困ッたんだ、だから口から出任せに呉服屋小間物
 屋に借りがあり、何屋に借りもあると、借金を三百兩計り吹
 掛けて遣ッたんだ、爲ると引祝か幾等だと言ふんだから、是
 も二三兩で、都合二千八百兩ばかり、夫を佐野屋は心能く
 承知をして、三千兩金子を出さうと言ふんだ、依て夫を断る

憤ひ、是迄のことは皆伴りと思召して、身受けばかりは堪忍
 して呉んなまし、何を隠しませう寶生榮之丞と云ふ妾には、
 深く言ひかはした亭主があるんごますゆゑ、早々今呼寄せまし
 て、手を切らうとしました、何うしても承知をして呉れな
 いんごます「治郎左衛門は暫く考て居ました、治華
 魁、だから最初からお前にさう云ふ者はあからうと、是迄日
 が何遍念を押したか知れない、決して妾にはさう云ふ者は無
 いと云ふから、此所迄上り詰めたんだ、夫れはさう聞いて見
 れば無理にとも言へ無い、併し其所が相談だよ、何んご其榮
 之丞さんご云ふ人に會つて、双方に得心さへ行けば乃公の縁
 な者だが、相談對手にならぬとは無い、さうして呉れたら何
 うだ、お前も此萬字楯に勤めて居れば、未だ三年や五年では
 年は明かないと云ふとは、先刻重兵衛よりも聞いて居る、依

て何うか勤めをして居ると思つて、三年の間乃公の女房に成
 ッては呉れまいか、其内に子が出来たら、其子を佐野屋の相
 續人として、跡目を取らして遣りたいんだ、實は斯様な醜貌
 をして、吉原通ひも無いものだが、私も十八の年迄には斯う
 云ふと何んだが、今業平と人に緋名をされた者、然るに十
 八の年に抱瘡をして、夫から此様な恐しい醜貌と成つたのだ
 、尤も夫迄には諸方から縁組を言ひ込んで来た先も澤山あッ
 たが、斯様な顔に成つて見りや、皆な先方から断り、そこで
 斯く吉原通ひと出掛けられた譯だが、れ前さへ三年の間辛抱して
 呉れたら、夫迄はお前の亭主の榮さんごやらは及ばすながら
 私の弟分として、此江戸に支店が八軒あるから、其内で榮さ
 んの氣に入つたる所を明渡して、尤も本人が好む渡世と、何
 んでもさせやう、三年経た曉には、岐度私が備合て媒介をして

第二二回

八ッ橋は治郎左衛門に對ひ、榮之丞の來りしを申します、治郎左衛門も何んな男であらうと待受けて居りましたが、道は八ッ橋の情夫はどあつて黄八丈の下着に上着は米澤、黒縮緬の羽織の着流しでございますから、一寸見ませれば旗本の御次男さんとしか見せません、立派な男でございます、治郎左衛門之を見まして「是は、お前さんが榮之丞さんと云ふれ人か、初めてお目にかゝります、私は佐野屋治郎左衛門でございます、定めて八ッ橋から聞き成すつたであらう、御得心下さりまして、私も大に結構であります、サア何うか御遠慮無くお進みなさい、榮は佐野屋の大尽でございますか、何分此後は宜しく頼ひ申し上げます、其所へ着座を致しました、傍には都阿波太夫丸善杯は「先くお話が圓く治まら

お前と榮さんとやら云ふ人と、天下晴れての夫婦にしやう、又渡世の資本も望み次第用立て進やうから何んど三年の辛抱は出来まいか、夫も厭なら致方は無い、何うか榮さんに相談をして見て呉んな」と随分捌けた話でございますから、八ッ橋も夫も厭とは言ひ兼まして「八ッ橋や寧ろ榮さんに其話を話しまして、本人が得心ならば直と此座敷へ連れて参り、兄弟分の盃が願ひたいんざます、治、然うして呉れりや私も結構、何うか程能く話を頼むよ」とありますから八ッ橋も再び下へ降りまして榮之丞に此次第を話しますと、寶生は暫く腕拱き思案に及んで居りましたが「チヨツ、若鯛を吐しやアがる、ヨシちやア乃公が行つて會はう、八ッ橋や榮さんお前得心かへ「マア何んでも宜い、己に任して置けど八ッ橋と同道にて、二階座敷へ出掛けて参りました、

して結搦でございます、失禮ながら我々が一寸仲人をと、
 治郎左衛門が献す盃を榮之丞に俯めさせる、暫し此所にて酒宴
 を催して居りました、榮之丞は酔がまはるに附きまして「汝
 此化物奴、金子で頬を張りやアがるかど、思て見れば悔しく
 て堪りませんもの見、治郎左衛門の傍へ來りまして「時に
 兄さん、斯う物事が圓く行きやア、相互に結搦扱お前さん華
 魁を何時身受けでございますね、ハイ話さへ定りませれば、
 今日にも片附けたい心底でございます、左様か、兄弟分と成
 ッて弟が改めてのお願みだが、何んぞ聞いて貰ひたいが、何
 なものでせう、ハイ私の身に叶ったとなら、何でも承りませ
 う、さうか、そいつア有難へ、全体此八ッ橋華魁を今日身受け
 をしたら、明日からでも直に己に呉ねへか、エーッ何と……
 「サア八ッ橋を直己が女房にして抱て寐んだ、だから身受を

した其日から、乃公が貰ひたいんだが、何んなものだらう、
 、、、、、それは失禮ながらお話が違ひませう、何の爲に前さ
 んど兄弟分に成りますか、元來八ッ橋に關係のある御人と承
 りますから、夫ゆゑ三年の間……「イヤ、馬鹿に爲るや、何
 だど、黙て居りやア好いかと思ッて、此化物奴、金子で面張
 るのも大抵にして置やアがれ、何んだ三年も汝が好き自由に
 懐癖をして、其れ餘りを乃公に呉れるとは、何を吐しやアが
 る、此榮之丞はナ、八ッ橋の如に浪人をして今では斯る身の
 上だ、夫を汝に此女を渡して堪るものか、畢竟するに今迄は
 何事も我慢をして居たが、最う斯うなりや勘辨が出来ねへ、
 能もく、是迄は八ッ橋を好き自由なとをしやアがったな、
 ヤイ化物奴は全体鏡と云物を見たとはねへんだな、其醜貌で
 華魁を女房にしやうとは、ううくしいにも程がある、夫より

はな、故郷へ歸つて蚯蚓を切つて蛙を飛ばして居り、夫が
汝の性に合つて居るんだ、能くも今迄入ッ橋を、金子ゆゑ自
由にしやアがツた、之をくらへ」と云ふより早く隠し持たる
煙管にて、ヤツと一霹治郎左衛門の眉間を打碎りました、眉
間は碎れて血は逆る、アツと計りに治郎左衛門は、其場へ差
俯向きまして餘りのとに呆れて仕舞ひ、只何事も言はず茫然
と、懐中より手拭を取出し、額の血汐を拭うて居ります、實
生は突立ち上り「サアお化、汝も斯うなりや勘辨は出来ねへ
と吐すだらう、出て来い、聞きやア土百姓の分在で、少しは
撃劔も出来ると言つて、自慢をして居るとのどだが、汝も覺
ぬが有りア己にも覺ぬがある、此己も小野派一刀流だ、何時
でも勝負をしてやる、サア来いと帶刀の柄に手を掛けまして、
阿波太夫丸善藤八執れも中へ這入りまして、双方を宥めます

る内に治郎左衛門は只差俯向いたる而已、何事も申しません、
賢生は思ふ存分悪口を致して「態ア見やがれ、土百姓、抵抗
をようしねへか、此後入ッ橋に指一本でも觸やアがツたら、
承知をしねへからさう思へサア入ッ橋、乃公と一途に來い、ナ
此様な馬鹿な奴の座敷に居るにやア及ばない」と遂に入ッ
橋の手を捉つて、其儘其場を立去ました、跡に辯問共は口々
「大尽、定めてお腹も立ちませうが、御勘辨をなさいまし、彼様な業
浪人を相手に成すツた所が俗に云ふ不具と棒打ら、最う此上か
らは入ッ橋のとは思ひ諦めてお仕舞ひなさいまし、私等ならば
叶はぬ道も飛附いて喧嘩をしますすが、道は大家のね大尽丈あり
まして、御辛抱強い所は實に感心でございませう、此上からは彼
奴等の面當に、他の華魁をお買ひなさいまし、岐度お周旋を致し
ませう」治郎左衛門は無念の齒切を致して居りましたが「此座敷

に居る奴は、口で兎や斯う言うては居れど、皆一ツ穴の狐である
 かア……ア、能も是迄已を馬鹿にしたなア」と口には言はねど心の
 中で只無念の涙に暮れて居りましたが、少時あつて「ヤッお前
 さん方の御親切は有難うございます、ア、今のは好い異見で
 ございます、成程鏡を見たならば、此様な化物が女郎買ひも無い
 ものだ、是でスッパリ迷ひの夢も覺めました、オイお前等主人に然
 つ言つて、勘定をして呉んなア、アラマア大尽宜いぢやござい
 えせんか、他の華魁をお呼びなさいまし、治、イヤイヤ、何うかさ
 う言つて勘定をして貰つて呉んな早々其の日勘定は済し、萬
 字樓を出掛ましたが、誰一人として戸外へ送つて出者も無く
 、治郎左衛門は振返り、萬字樓の方を睨詰り、今に此返報を
 岐度してやらうと、無念ながらも仲の丁の、向ふ七軒彼の蕨
 屋へ歸つて参りました、女房おなかには目早に之を見附けまして

な「オヤ大盡、貴郎マアお顔を何うなすつたんでございます
 治「ナニ餘り銘酩をしたので柱で頭を打ました」「オヤ、矢は
 大變でございますね、お膏藥でもお貼りなすつたら……」治「ナ
 ニ大したことはない、併しれななさん、乃公の腰の物を出して
 下さい」「オヤ最うな歸りでございますか」「ア、今日は一寸宅
 に用事があるから」と彼の村正の一刀を購取まして腰に佩込
 み、大門を出まして吉原の土堤へ掛かつて参りましたが、何分
 無念さに足は一向前へと進みませず、一足行ては振返り、ハ
 ヲと齒を喰ひ絞つて、萬字樓の方を睨附けましたか「若
 し此儘飛込み行く時は、亡父が苦心に苦心を重ね、折角仕出
 した佐野屋の身代、水の泡と成つては亡父の位牌にも濟ませ
 、只此上からは故郷へ歸り、己の人別を除て仕舞ひ、無宿者
 と成ら其上で、再び來たつて榮之丞八ッ橋は申すに及ばず、重

兵衛夫婦阿波太夫、其他一同の奴輩を、斬捨て置可きや
 と腕附たる其顔色、實に恐ろしい有様でございましたが、や
 うく通り二丁目の佐野屋へ立歸つて参りました、番頭又兵
 衛と出向まして「是は旦那様、ね早いお歸りでございませぬ
 今日、都合に依れば、身受けをしやうと仰しやりましたが
 、お話は何うなりました、治又兵衛、是だから吉原通ひは最初
 から止さうと言つたのだ、實は残念だが聞いて呉れ、是々斯
 様く「斯く斯く」と吉原にてありし次第を物語りました、黙
 を聞いて番頭又兵衛「へー夫ぢやア其榮之亟と云ふ奴が……
 治「サア是と云ふのも丁度私に天から異見をして呉れたのだ、
 是で私も最う目が覺めました、實に此八月から今日迄、金子
 を湯水の如くに使ひ捨て渡世の方は浮の空、ア、ア、過つた
 、何んでも是から使つた文は、取返さなくちやなりません、

夫に附いて明朝早く當地を出立しまして故郷へ歸ります、
 併し又兵衛、立つ鳥も跡を濁すなど云ふともあるから、僅々
 など、吉原を倒したと言はれるのも残念、萬字樓の柳は悉
 皆して來ました、が兩三日以前に葛屋で遊んだ時に、祝儀に遣
 る金子が少し足り無かつたので、佐治兵衛の手許から、三十
 兩の金子を立替へさして置いたが、夫は明日でも紋久一平の兩
 人に持たしてやつて呉んな、夫さへ柳へば一文も、吉原では
 借金は無いら、と萬事此とを頼み置きまして、其夜の宅に
 ソコく支度を致し、無念を飲んで治郎左衛門は、翌朝早
 天に故郷の船橋村さして出立を致しました、然るに番頭の又
 兵衛でございませぬが、殊の外立腹を致しまして、早速柳橋同
 朋町の紋久一平の兩名を呼びに遣りました、兩名は佐野屋か
 らの使ひでございませぬから、直様出掛けて参りましたが、

店先には又兵衛大尉立腹の体でございますから、
 さん只今は使ひに預りまして何か御用でございますか、と
 言ひながら宅内へ這入ッて参りまするなり、番頭の又兵衛
 ヤイ紋久一平、兩人共決して上るゑはならぬ、其所に立ッて
 居るへ、貴様達ア義理も人情も知らぬ奴だ、間間は畜生にも劣
 たものだなア、何か致しましたか、又、萬事、何も斯もあ
 るか、素より主人は彼の様な醜貌ゆゑ、萬事の所を汝達に頼
 む置たのだ、然るに彼の様な畜生にも劣た様な女を旦那に
 世話をして、悪い虫が附て居れば附て居ると、何故最初から
 吐さぬ昨日旦那一人れ出ましに成て、萬字樓の宅で八ッ橋
 の身受の相談を成ッたのだ、爲ると彼女には實生榮之丞と云
 ふ悪い虫が附いて居やアがつて旦那より結構過ぎたる身受け
 の御相談を成ッたのを、其席上でメチャクにしやアがる而

己ならず、種々の悪口を吐いて、宅の旦那の眉間を碎りやア
 がッたんだ、夫ゆゑ旦那も非常の御立腹をなすッて吉原へは
 再び通はぬと今朝早く御國元へ御歸りなされた、之れと云の
 も貴様達ア花を附けて貰ッて祝儀さへ戴けば、跡は何うでも
 好いと薄情い奴根性だから、彼の様な者を當加ッて素知らぬ
 顔をして居やアがるのだ、汝等の様な畜生見様な奴は、再び
 此佐野屋の敷居は跨げさせないからさう思へ、又旦那も此後
 は、吉原へは通ひ成さるゑもあるまい、依て今後乃公の宅
 の出入は止めるから、さう心得る、又葛屋の宅は手前が周旋だ
 から、小鏝一文も借りては置かんだ、兩三日以前旦那が佐治
 兵衛から、祝儀の金子に差支へて、三十兩れ借りなすッたさ
 うだ、サア此所で三十兩の金子があるから、此金子を手前の
 手から葛屋へ持ッて行て拂をしる、其金子も喇へて行け、犬

なら尾でも振るから未だ優しだ、汝等と犬より劣つた奴だ、
併し犬と見做して遣らから三週廻つてか首肯をする、此畜生
野郎奴、早く持て歸れ、紋久一平は此一言に、暫しは呆氣に
取れて居りました、紋久一平は此一言に、暫しは呆氣に
好んで入ッ橋の華魁を旦那に取持をしたと云ふ譯でもござ
いません、華魁の道中を御覽なすつて、彼の女より他に氣に
入ッた者は無ど仰しやりまして、據無くお世話を申したので
ございませぬ、又私も入ッ橋に其様な悪い虫が附て居ると云
ふとは存じませぬ、何うも左様に言はれますると私共は
甚だ迷惑でございませぬ、又筈棒奴迷惑も我々も要つたものか、然
云ふ所を調べるのが手前達の職分だらう、夫を調べるもせず
捨て置くやアがるから、彼の様などになつたんだ、愚圖く
言はずと此金子を脚でふへて、ウワンと言つて早く此店を立

退れ、小僧よ、天秤棒で此奴等二人を打擲れ、小僧は面白
分に「心得たした」と庭へ飛びました、紋久一平はこいつ
堪らん、大に驚きながら、早急金子を受取りまして、佐野屋
の店を逃出しました、やうく途中へ来りまして、紋久一平、
オ一平、報間はつまらねへものだな、番頭さんには彼様
かに言はれて、剩へお出入も今日限りだ、何うしたものたら
う、「さうさねへ、本来言つたら葛屋が悪いんだ、八ッ橋華魁
には實は斯う云ふ間夫があるよ云ふとを、乃公へ切に耳語で
もして呉れたら、此様なにもあらぬのだ、紋久一平、如何に頭
を下げなくちやならない商賣とは云ひあがり、畜生呼はり
されて、此様なつまらねへとはありやアしねへ、ねへ一平、
是から此金子を持って行つて、佐野屋の番頭さんに言はれた丈
けのとは、葛屋へ返報をしてやらうか、一平、然うだねへ、さ

うなどしなけりや我々の腹の虫が得心しない」と兩人は非常に立腹をしながら、早々吉原仲の町の、引手茶屋彼の蔦屋をさしてやッて参りました、紋久一平の兩人は、惟い顔を致しおがら蔦屋の表より這入りまして「オイお仲さん在宅かへ」
 オヤこれと紋さんでございませうか、能く入らしやいました、サアマアお上り「オイお前の宅の良人は居るかへ」
 何でございませう「エ、解らねい奴だ、をんと云ッたら佐治兵衛のどよ、オヤマア如何したんですね、何々もかうも無へ、をんが居るならをんを此處へ呼べ、夫婦揃ッて此處へ列べ」
 此時奥に居りました佐治兵衛之れを聞きまして「何う爲たんだ」と蔦屋へ出掛けて参りました、紋久はそれと見るより「ヤイ佐治兵衛、汝とれ仲は畜生にも劣ッた奴だ、佐野屋の大盡に何で彼の様な悪黨女を周旋やッがア、賢生榮之丞とい

ふ虫が附て居るなら附て居ると、何故最初から吐さねへのだ、昨日身受けの相談を成ッた際に、大盡の眉間を打裂アがッたさうだ、汝等をはじめ何奴も彼奴も、一ッ穴の狐どなッて、能も大盡を馬鹿に爲アがッたナ其ゆゑに乃公等は佐野屋の店を失敗して仕舞ッたワイ、其許りぢやアない、畜生呼りをされて、すでに天秤棒で打れやうと爲んだ、此上からは言れた丈のとは腹癒に言ッて遣るんだ、サア兩三日以前に汝の宅で大盡がね借りなさッた三十兩の金子、返して遣るから、兩個とも尾をふッてワソと泣け、少時此金子は此處にお預けたよチン、爲るエこの馬鹿野郎、佐次兵衛は之れを聞きませると、烈火の如く憤りまして「ヤア紋久、一平、何を吐す貴様達は、黙ッて聞いて居りア暫間の分際として、其悪口は何だ、佐野屋の大盡が是れから遊びに来ないど仰しやア其れ

迄だ、此三十兩の金子は何の爲めに貸したと思つて居やアが
 る、乃公の宅の柳に貰ふ金子ぢやア無いぞ、たどへ三日でも
 貸して置ア恩金だ、何で有難うございますと禮を吐さぬ一
 を喰へ、禮も縁瓜も要たものか、再び手前の宅の敷居は防い
 で呉ると云ても跨がないぞ、已等も其丈のとを言はれて来た
 んだから謂は、悪口の請賣だ、ワシと泣け佐ウヌまた吐かす
 か、左様なことを言はれて見りやア此金子と受け取らない、大
 きに有難うと一言の禮を云つて返却に來い、紋馬鹿を言へ、何
 んで禮を云ふ奴があるものかい、手前もまた貸した金子なら
 受取つて置け「否々決して取らない」取つて置けい」と双方共
 に大きな聲をして喧嘩を致して居りますと、往來の者は入口
 より覗き込みまして「オヤ、大變な珍づらしい喧嘩もある
 ものだよ、アソ彼ん様に三十兩の金子を、彼方へ遣り此方へ

遣りして送うしても取れ、取れないと云つて争つて居やアが
 る、△ホンにね、モシ、双方共に入用の無い金子なら私が貰
 ひませうか、紋、エ、此畜生、往來から餘計なことを吐す、ヤ
 い、佐治兵衛、何うしても取らぬか、佐、オ、取らない其んなどを
 言はれて取る馬鹿があるかへ、好し、取らなけりやア出る所
 へ出ても取らしてやるぞ、面白、出る所へ出ても取らんの
 だ、「よ、覺て居るい」と兩人は腹立紛れに戸外の方へ飛出
 しました、傾て大門口の片傍に在る自身番へ出掛けて参りま
 して、紋、エ、私は柳橋の藝者でございます、只今仲の町葛屋の
 宅へ此三十兩の金子を拂ひに参りまを、主個が強情で送う
 しても取て呉れません、何卒貴公方から篤とお諭を願ひまし
 て、此金子を受取るやうにして頂きたいのでございます、此
 詞を聞き玄關に詰めて居りましたる者も變に思ひまして、早

々葛屋を呼びに遣りましたが、程なく佐治兵衛は出掛けて参
 りました。何故此金子を、お前さんの方へ拂ふといふに取
 らないのだ。佐へイ皆さん聞いて呉んなさいまし。此野郎共
 は大變無法お奴でございます、私等夫婦を犬だと云やアがッ
 て、種々な悪口を致します、だから取らないと申しました」
 と有りし次第を物語りますると、詰て居ります人々も「それ
 はお前方が好くないぢやないか、何故借た物おら禮を云ッて
 返却ない。奴だッて禮が言へますか、私達も佐野屋さんの宅で
 斯様くには言はれたんでございます、だから其丈けの事を云
 ふのは當然でございます」と中々双方共勢が強うございます
 から、玄關の人々も持餘しました。夫れでは御兩所、宜しい
 私か預りましたして、葛屋の氣の濟んだ時分に渡しませう」とや
 うく受取りました。サアこれからだ、一平出て來い、是れ

から廊内中を觸れて歩いて遣るんだ、と彼の八ッ橋の事をば
 悪意先を廻りまして、様々と悪口をして置いて引取りました、
 所が悪事千里を走るの例にて、非常に八ッ橋のことが廊内の
 評判と成りまして、世の中に八ッ橋といふ女は顔容は優しい
 が可怖い女もあるもので、あゝ云ふ女と買馴染にゐると、末
 には情夫の衆之丞といふ奴が出て來て、其客の眉間を打裂る
 であらうと、誰言ふとなく評判高く相成りまして、遂に八ッ
 橋はピタリッと賣れなく成りました、然るに何分取巻きの多
 い女でございますし、其うへ衆之丞は其身が養ふて居ります
 から、追々八ッ橋も困りまして、借財も出來て参ります、
 かねて翌年の正月には晴れの衣裳も新調ことならず、初店
 に坐ることも出來ないやうな始末でございまして、大きに困
 却て居ります、所へ泣面に餘が刺すとは此の聲で八ッ橋の身

には是非とも百兩と二百兩の金子が無ければならぬ次第が
 来ましたのは、此萬字樓のお職の華魁に九重太夫と申すのが
 ございまして、此者が此度去る旦那に身受をされまして、立
 派に引祝も致して、萬字樓を引きますに付ては、お職の華
 魁でございませうから、此お職部屋を先づ妹分に致してござい
 ます、八ッ橋に譲つて参りまするに相成りました、八ッ橋
 も斯うなりますと、賣れぬながらも先づ當家ではお職と成ら
 なければならぬ次第、九重から譲ひました座敷を其儘にし
 て這入る譯にも成りませぬ、釋ひ普請なしても餘程金子の要
 ること、逆もその金子の出所もなし、大きに途方にくれまし
 た、斯う云ふとなら、お化の大尽が来て居れば、立派に座敷
 も普請をして、お職の華魁と云はれて見るのに、あゝ今更思
 へば榮さんが、短氣なとをしたばかりに、取返しにならない

こと、今は大きに後悔を致しまして、切迫詰つたか一日の
 こと、彼の阿波太夫を呼びに遣りました、都阿波大夫久々に
 出掛けて参りますと、「オヤ阿波さん、お呼立て申しまして、
 甚だ濟まないものでありんすが、些とあなたに折入つて、お願
 があるんが、阿波さん、今度引きなすつたんだ、そ
 すがね御存じの九重の姉さんが、今度引きなすつたんだ、そ
 の部屋を妾が貰つたんが、今度引きなすつたんだ、そ
 屋に這入るとも出来ぬ、繕ひ普請をして、百兩以上の金子
 は要るし、今では客は一人も無し、實に困つて居るんがま
 すが、何卒あなたのお骨折で、佐野屋の旦那をモウ一遍お呼寄
 せて頂くことは出来ぬんでせうか、阿波太夫は其語を聞き
 まして、「それ御覽なさい、今更成つて目が覚めましたナ、私
 も去年の彼の際には、餘りな前さん方の仕向けが宜しくない

と思ひました。が、果せるかな此様な事になつて來ましたらうが
ね、併し對手は彼の標なれ化の大尽ですから、中々呼に行つ
た所が、一應や二應では出て來そうなるまいと思ひま
す、依つて今度は一つ榮さんと呼んで相談の上、先づ表面的は榮
之丞さんとは縁を切つたといふ、何か証據を持って行くことにし
て、それも私一人では不可せん、丸善藤八を伴れ、又女では
萬屋のお仲さんを頼んで、四人で出掛けて行つて、十分謝罪なく
ては、逆も出て來さうなこともありません、それがお前さん
に出來ますか、ハ、ハ、ハ、夫れ之モウ致方がないから、榮さんと呼
びに遣つて篤と相談をさせよう、早速榮之丞を呼に遣つて
相談に及びますと、寶生も此節は途方に暮れて居ますから
何分阿波さん宜しく頼む此通りと、三行半の離縁狀を記して渡
しました、又八ッ橋よりも治郎左衛門に宛てたる手紙は、心

を簡めまして認めに及び、別段四人の旅用として、ひよい工
面を致しやう、二十兩ばかり金子を渡すところ相成りました、
是に至つて都阿波大夫、丸善、藤八、萬屋のね仲と四人にて
十分相談の上、享保の九年二月の朔日、朝早く吉原を出立致
しました、熊々野州佐野の在、船橋村は佐野屋の本宅に、再
び治郎左衛門を引出さんと、呼出しに参りましたるばかり
に、百人以上の人を殺害に及ぶ、大騒動の根原を是から惹起
しますといふ一段でございしますが、チヨイと一息御免を蒙
りまして……

第三回

少し話の前に戻ります、茲に彼の佐野屋治郎左衛門で
ございしますが、享保の八年十月廿四日に、無事に郷里の船橋
村へ立歸りまして、我宅にて熟々と考へますると、甚麽にも

道回の榮之丞の致し方、又八ッ橋の是迄吾を救いたかと思
 て見ますると、夜の目もまんじり寐らればこそ、只残念どの
 み心得まして、其身の一命を棄るは素より覺悟、何卒一て怨
 を返したいことよと、唯其れ而已を考て居りまするが、折角
 是迄仕上げたる佐野屋の身代、我亡き跡に此儘埋木に成る道
 理、これ又如何にも残念に思ひまして、何うにかして當家の
 身代を此儘持續けて行くやうに計ひ、只此身の一命ばかりに
 て、怨を發したいと心得ましたが、不圖思附きましたは、彼
 の舍弟の辰之助にございまするが、此者は前回に述べました
 る如く、叔父竹川周碩の許へ養子の身分と相成りまして、其
 後叔父周碩も此世を去りまして、只今では辰之助が三代目の
 竹川を相續致し、最早これには家内も出来、一人の男子も出
 生致して居ります、然るに當時の周碩は、一向醫者の業体が

五十

其身に適はぬものと見ゆまして、親の代とは違ひ、病家先も
 追々落ちまして、身代もツリツリ窮迫なり、今は下女下男に
 も暇を出しまして、ホンの親子三名が詰らぬ生計を致して居
 ります、其うへ周碩は病氣に罹りまして、醫者が他より醫者
 を頼んで、薬を服ひといふ始末に至り居まして、既に其年の
 夏も少々困ることが出来まして、態々佐野屋の宅へ無心に出掛
 げますると、治郎左衛門は事の外立腹致しまして、全体養家
 の身代も相當に有る所へ、實父より汝が養子に行く際には大
 枚三千兩と云ふ持參の金まであてがひしに、悉皆空乏して仕
 舞ふとは、甚だ困つた奴と、一向取合うて呉れませぬ、依て
 周碩も今は負債了簡を出しまして、實兄でありながら薄情な
 奴と、其後は兄弟絶交を致しまして、周碩も決して佐野屋の
 許へは立寄ませぬ、又治郎左衛門も其後は周碩の方へも一向

五十一

参らす、只今の處では兄弟とは云へど他人同様に相成て居り
 ます、然し親の泣寄と云ふとがありまして、治郎左衛門も今
 度の事件に就ては、黙々考へました、是れは率と當佐野屋
 の身代は、残らず周碩に譲つて仕舞ひ、其身と首尾好く當所
 にて人籍を除き、無籍者と成つて、其上再び吉原へ出掛け、
 怨ある奴輩を残らず討取らむといふ決心に及びました、頃
 しも十月中旬のと、雪の中を夕景からナラく出掛けまし
 て、竹川周碩の門口に参り、直様案内を乞はむと思ひまし
 が、何分久しく遠ざかつて居ります間柄も何となく休裁悪
 く、表の格子の所より、宅内の容子を窺うて居りますと、
 宅に在ては周碩夫婦、左様な事とは知りませす、女房も直は
 周碩の寢て居ります枕邊に來り「アノモレ貴耶に一寸御相
 談がございませす、起きて下さいナ」此聲に周碩はやうく

寢床から頭を持ち上げて「何だれなは他ぢやア無いので
 ございませすかね、モウお小遣が些とも無いのでございませすよ
 又貴耶に此様な事を云つて、叱られるかは存じませせんが、聞
 ければ此節佐野屋の兄さんも宅へ歸つて在らッしやるのと、
 寧ろ妾が本家へ出掛けまして、少しばかり無心を云つて見た
 ら如何なものぞございませう、是迄に持て居ました衣類等皆
 は皆質料に置いて仕舞ひ、今では何にも無し、万望妾を佐野屋さ
 んの宅へ遣つて下さいませし、馬鹿を言へ此の儘夫婦が飢ゑ
 て死なうとも、決して行くことはならん、彼奴と乃公とは
 ツツ兩個の間柄、眞の兄弟とは云ひながら、畜生みたやうな
 奴だ、己の親父から、腐るは迄の身代を譲つて貰つて置
 きながら、乃公が儘かな無心を云つたッ少しも貸さないど
 いふ薄情な奴根性、其の上にな公に對ひて種々の悪口を仕や

アがッたんだ、何の様な事があっても彼奴には借らうといふ了簡は無、だから行くことは成らん、それで貴郎困るぢやございませんか、佐野屋の兄さんだッて、此様に貴郎が困ッて居らッしやると云事は知りませぬ、夫故に断りを爲さッたんでございませうが、お前さんの病氣のことも、妾が行て委しく話し込めば同胞の兄弟ですもの、満更知らないとは仰しやりますすまいから、怒らないで何卒妾を遣ッて下さいませしよ、周、いけない、何うあッて遣ふことはならん、乃公と兄があると思へない、聞けば此節は江戸表で、無暗と女郎買を爲やアがッて、金銀を湯水の如くに使ふといふ、第一彼奴の奴根生が分らない、乃公が斯うして長く居りやア、周や何うだ、見舞に来たッて、満更他も笑ふ者ぢやないが、あゝ貧乏は爲たくさいものだ、金が無くなるも兄弟にまでも馬鹿に

されるが……」とホロリとばかり一ト平、蒲團の上に倒しました、晝とは違ひ夜分のこと、格子の外に佇聴せる治郎左衛門は、さては周頼が斯く長病ひをして居るかど、心中不憫に思ひまして、やうく表の門の所へ廻ッて参り、ト、門の小戸を叩きながら「オイ、一寸開けて呉れないか、オイ……」此時宅内より女房の聲として「ハイ誰方でござります、乃公だ、佐野屋治郎左衛門だ、チャイと此處を開けて呉んな」此聲を聞きつけまして、おなはは大きに喜こび「アレマア貴郎、噂をすれば薩とやら、治郎左衛門の兄さんがお出でございます」と起たんとするを引止めて「周、ヤイお直何處へ行く、決して開けるに及ばぬ、何奴だ夜分に人の門口を叩きやアがるのは「イヤ誰でもない、佐野屋治郎左衛門だ、周頼一寸開けて呉、馬鹿を吐せ、其んな奴に用は無、いんだ、乃公にはナ、

治郎左衛門と云ふ兄は従前あつたけれども、義理も人情も知
 らない奴だから、附合を仕ないんだ、何しに來やアがツたへ、
 決して開けることはならぬ、トットと歸れ、治「オイ、周頑、
 手前のやうに其様に恐るものぢやアない、乃公が今夜出て來
 たのは少し事情があつてのさだ、マア腹を立てずチヨイと此
 處を開けて呉れ、お直はやうやう良人を宥めまして、入口ま
 で來りました、門を開きまして「オ、兄さんでございます
 か、能くお出下さいました、御存じの通りの良人の氣性、誠
 に困つて居ります、サア何卒此方へお通りを願ひます、治「オ、
 お直さん、久しく逢はぬ、大きに御不沙汰を致しました、夫
 れでは通して貰ひませう」と玄關より上りまして、
 其次の室
 に來て見ますれば、此處に巨燈をしつらへまして、
 病人は鞆
 ホックと生やしなから、寢込んで居りました、今治郎左

衛門の來りしを見て、忽ち飛起きました、枕を片手に携へま
 して、周「人の宅へ何しに來やアがツた」と既に治郎左衛門に打
 て掛からんと致します、其手を確乎捉へまして、治「ヤ、周頑、
 汝ア兄に對つて何をする、周「ナニ兄だ、何が兄だ、兄なら兄ら
 しいことをしたとがあるかへ、乃公が今年の夏に困つたこと
 が出來たから、さうか兄さん百兩ばかり貸して下さいと云ッ
 た際に、何故断りやアがツた、其上乃公を甲斐性なしたと云
 ったぢやねへか、だから貴様とは交際を爲ない積りだ、此處
 の宅は乃公の宅だへ、治「ハ、ハ、ハ、そりやア言はないでも知れて
 居る、手前が養子に來りや手前の宅は當前さ、併し周頑、マ
 ア乃公の言ふことを一ト通り聞いて、それで腹が立ちやアモ
 ッ其迄のさよ、成程今年の夏手前が來た際、乃公不思議だッ
 たからツイ金子は貸さなかつたのだ、かねて死なれた叔父さ

んも、相當の身代を遺してお置なすつたし、又お前も、亡父か
ら三千兩といふ大枚の金子を貰つて、それで當家へ養子に
たんだらう、僅か五六年経過うちに其金子を皆無して罷了
どは何うしたものだ、餘り手前が意久地が無さ廻ると思つた
から、異見の爲に乃公貸して遣らなかつたのだ、併し今も戸
外で聞いて居れば、今日の小道錢にも差支るといふやうな、
よもや其様な生活になつて居やうとは乃公も氣が附かない、
二々言目には兄貴は旨いものだ、親父から彼丈け貰つたどお
前は云ふけれども、私が親父から受けたる身代は減さなよ、
僅かのうちに食ふ物も食はないで、十七八万兩の身代は仕上
げた、して見ればお前の方は乃公から見や、遙かに榮耀榮
華はして居る、知つての通り乃公は此様に、抱瘡から可怖し
き顔容となつて、女房も未だ帶つこともならず、夫ゆゑ番頭

五十八

や省の者の勤めに依て、今年少し吉原で金銀も使つたが、た
どへ、何程使はうども、親父から譲られた身代には未だ手は
附けない、それだに依て異見も爲たのだが、マア併しそれは
過去つたこととして、今夜周石、お前の宅へ出て来たのは、折
入て乃公が相談だが、どうだ、厭なら無理にとは勸めはし
ない、お直さんも篤と聞いて呉んな、知つて通り私の身代と
成つてから、家内もなければ他にこれといふ楽しみも無い、
所が先年戸田の松原で賊難に罹り、既に一命にも及ばうとい
う所へ、通り掛つた築木武助先生に助けて貰つて、それから
其先生に長らく宅に逗留を願ひまつ乃公が楽しみにと、ホッ
く習つた劍術が、遂には築木先生から、鞍馬八流の免許を
受け、今では口廣いことを言ふではないが、他の流義はさ
知らず、鞍馬八流といふ流義では、江戸四里四方廣しと雖も

五十九

私くらしい使ふ者が無い、所が何と周石、妙な事が出来てきた
かねて御出入をする本郷の加賀様のお屋敷より、此間お召し
に成て出掛けたところが、主公の御目通りにて、ユリヤ治郎
左衛門、其方は町人ながら、御道が適れどのこと、今日は其方
の御道が見たい、余が近習の者と立合を申付けると、御辭退
申しても御聴入らない、そこで乃公も致方がないから、廣庭に
飛下りて、加賀様の御家來衆を對手に、七人續け打ちの後よ
り出でた立派な侍、これも七八本打合はすと、間もなく其處
で乃公が勝となつたのだよ、後で聞いて見りや其のお方は、
當時加州公のれ手を執つての御指南番、平井某といふ立派な先
生といふことが分つたので、乃公もゑらいとを爲たと思つた
のだ、然るに加賀の殿様は、事の外御威心を遊ばしたものと
見て、治郎左衛門其方は町人に致して置くのは惜しいものぢ

や、依て余が召抱る、知行は千石を遣はすとの仰せ、所で
ア據る無く御請をしたのだ、乃公も生涯の樂みには、是丈け
の腕前だから、加賀家へ出掛けて行つて、千石を頂戴して、一
寸出るにも鎗を突かせ、馬に打乗つて家來を引連れ、生涯侍
で世渡りがして見たいと、思つて見れば急に町人が厭に成つ
たのだ、然し死亡だ親父も彼丈けの苦心をして、長者鏡の番
附にも職せられる様になつた佐野屋の身代、此儘埋木にする
譯にもならず、そこで今晩乃公が來たのは、周碩乃公の身代
を貴様に悉皆譲與うと思つて出て來たのだが、何んなものだ、
貴様は何と思ふか知らぬが、乃公は兄弟だから云つて遣る
が、手前には醫者と適つて居ないのだ、叔父さんの代とは違
つて、診断は下手なり是は廻らす、世間の者は何といふ、竹
川の先生に掛つたら、癒る病人も追々悪くなる、彼の人は病

人を殺すことが名人だと、可厭な評判を取って居るだから、手
 前之醫者は廢せ、ト云つて叔父さんの名義を棄てるといふので
 は無い、此處に居る此辰坊を、生長の後は江戸へ出して、一
 廉の醫者の許へ書生に遣つて、しつかりと醫學のことを教へ
 込んで、其れから後は此宅に閉て置くが可い、夫婦共に明日から
 やれ、マア其迄は此宅は閉て置くが可い、夫婦共に明日から
 でも乃公の宅へ来て、乃公の身上をスツカリ引受けて、商人
 に成て行く氣は無いか、それとも貴様が厭だといふなら、強
 ひて乃公は頼みはせぬ、他人を撰んで養子とする分のこと、
 又貴様が承知とあれば、親父から譲り受けられた十萬兩の身代と、
 江戸の八軒の支店、在下の本宅は申すに及ばず、田地畑山
 林まで、残らず貴様に譲つて遣らうと、それで態々出掛けて
 来たんだが、周碩何うする貴様は「周へ……」夫婦は少時呆れ

かへつて居りましたが、何んな偏屈なもので、此話には厭
 だといふ馬鹿はございませぬ、今日の小遣錢にも困つて居り
 まする夫婦の者、遽かに十萬兩からの、身代を遣らうといふ
 のでありますから、周碩も事の外悦びまして「それは兄さん、
 大さな有難うございます、何卒分宜しく頼み申します、
 仰せの通り只今限り醫者は廢めます、せうか兄さん何分にも、
 そこは兄さん「ヤイ」無闇に兄さんくと吐しやアが
 ッて、今迄手前何と云つた、得手勝手な奴もあるものだ」と
 やうく、茲で話が纏りました、佐野屋は其夜は引取りました、
 早速翌日に相成りますと、當竹川周碩の宅へ、當分閉める
 ことに致しまして、親子三人佐野屋の許へ引取りました、斯
 くて周碩の病氣全快を待ち、名を改めまして治兵衛と呼び、
 其當時は商法上の事、或は金銀出入の事、何くれとなく日々

治郎左衛門より、周碩の治兵衛に教へ込みまして、其歳は空しく暮りました。明くれば享保の九年、新玉の春を迎へました。

第四回

扱治郎左衛門は、吾跡目は是で出来ましたもの、是に其身を人別を取除けて仕舞ふと云ふのは、中々出来ねとてございまして、種々考て居りました。漸々一計を思ひ附きまして、正月十八日でございまして、村中一統の者に廻状を廻しました。「私共兄弟前祝の事有之候に付き、明十九日各自御一統様に粗酒一盞差上度候間正巳刻時より御不参無く、百事御縁合せの上、私宅迄御光來を願上候」と云ふ文面の廻状を、同村代官稻木清十郎名主藤左衛門善提所天明寺住職、其他五人組寺屋の師匠を首り、總て當村八十戸の銘々へ残らず廻状を

廻しました。村の者も之を見まして、何であらうと思ひました。誰一人として不参の者も無く、主人に差支があれば家内又之兄弟なりが名代として、十九日は巳刻前から續々佐野屋を差して出掛けました。孰れも奥の座敷へ通ります。在方は殿重な者でございまして、貧福を問はず總て村内で舊家が追々上席に直りまして、其席順が定まりまして着座を致し、する、間も無く料理も出でます。第一此料理に村方の者は荒膽を取控がれましたと云ふのは、先づ代官首り順に銘々の前へ吸物膳を差出しました。其吸物膳の真中に焼物皿を載せまして、其上に當村内の者が治郎左衛門から、大小借財がありませる、其借附であります。証文を一々載せまして、又貸の無い者には一人前に二十五兩宛の金子を載せまして差出しました。互に村の者は顔を見合せまして、何であらうと

手に取って見ますと、金子二十五兩でござりますから、夢
では無いかと皆の者は呆れ返りまして、只茫然と致して居り
ます、即ち代官稲木清十郎は此佐野屋に三百兩計りの借財が
ござりますが、悉く証文が載てござります、稲木之大に驚きま
して、何ゆゑ治郎左衛門は斯様なことを爲るかど、口には言は
ねど互に目計りキヨロく致して居ります、程無く佐野屋治郎
左衛門は背後に弟當時の治兵衛を伴ひまして、其座敷へ罷り
出でました、治郎左衛門の身装を見て再び村の者は驚きま
した、上着は黒羽二重五つ所の紋付き、黄八丈の下着を着し
、先蓋平の袴を着け黒斜子の羽織を着用致しまして、小刀を
前半に佩み、立派な大劔を左の手に携へ右手には扇子を持ち
、悠々と出でましたるは天晴立派な侍士姿でござります、二
統の者は是は怪からんと皆々治郎左衛門の方を視詰て居り

まする、佐野屋は席の中央へ着座を致しまして、側に一刀を
引付け、兩手を支へまして「扱お代官様を首め村方の御一統
の方々へ、此所より御挨拶を申し上げます、今日私共兄弟聊
か前祝のとかござりますに就て、斯く招き申しました、が、
御不參無く集り下さりまして、我々に於きましても實に有
難く心得ます、定めし御不審でもござりませうが、此度私共
本郷加賀様のれ屋敷へ鞍馬八流の剣道を以て、ね召抱へと相
成りまして、加州公より即ち千石の知行を頂戴致しました、
夫ゆゑ名前を佐野屋治郎左衛門常時と改めまして、加州公へ
仕官の身分と相成りました、夫に就きまして當佐野屋は、私共
舎弟竹川周碩でござりますが、御承知の通り此者は醫者は一
向不得手でございます、夫ゆゑ醫者を廢業させまして、私の
跡目を譲るに致し、名前も佐野屋治兵衛と改めまして、

ア是に依て兄弟の身分に就て大に歡びと致します。其祝として斯く各々様を招き申しました。何をがあと思ひました。が、聊輕少ながら心を込めました。御意に叶ひました。夕方迄は御緩りとお召し上りを願ひます。皆々之を聞いて暫しは呆れ返りまして、何とも云ひ様も無く、第一代官稻木清十郎も只茫然と致して居りました。高い所へ土持とは此事だ、私等も先祖の代から當地に代官を勤めて二百石、今でも矢張り二百石、夫に引代へ治郎左衛門は、町人より一足飛びに千石と之太い者だ」と大に感心を致しまして。稻木何うも治郎左衛門さん、始めて承りましたが、實に夫はお目出度いとぞぞる、成程お前さんの兼々聞いて居ります。劍道なれば加州公にて所望なさるも無理は無し、併し千石とは結構

なとでござる、尙又竹川さんが當家を御相續なさるのも是も御兄弟のとなれば御尤、何より結構なるれ焼物を戴きまして、遠慮無く頂戴致します。村中の銘々も此言葉に連れまして。「お目出度ござります、結構でございます。何よりの御馳走でございまして私には至って此焼物は好物でございます。何よりの御馳走なら何うぞお代りをして……」。「ヤイ、何を吐しやアがる、慾張りやアがって」と皆々金子証文杯は懐中へ納めました。其内追々馳走が出まして、村方の者は洪大も無き歡びでございまして、追々ど飲み始めました。斯て酒宴も半に至りまして、或は起つて踊るもあり、又は治郎左衛門に種々追従を致すもあり、充分下戸も上戸も推並べて酌を致しました。日の末刻頃に至りまして、治郎左衛門は時分は好しと稻木清十郎の前へ來りまして「時にれ代官様私は一才貴郎様にお願ひがと

ざります。――「何んだナ、他事ぢやアございませんが、私が加州へ参りましたして、家中の者へ指南を致しまするとに相成りますと、今迄とは違ひ千石取りの侍士となれば、我身ながら、も、身の行ひも少しは改めねばならぬと思ひます所が私の人別でござります、勝手などを申しまするが、佐野屋治郎左衛門は死去致したる体にして、此儘れ取消しを願ひたいのでござります、ト申すのは加州へ送つて戴きますと、先祖は町人から成上つた者と、家中の中に侮る奴が出来ますと、甚だ不都合でござります、それで私の思ひますは、此人別を消して、戴きまして只私と天竺浪人佐野屋治郎左衛門と改めて名を拵へたいと思ひますが、是丈を何うかれ含みを願ひたいのでござります」稻木は始終を聞き了まして「夫れと不可し他の事と違つて人別を取消すと云ふのは出来ぬとだ、夫もね前さん

七十一

が久しく脱走でもして、行方が知ぬとだ、或はホンの小前の水飲百姓とでも云ふなれば兎も角も、當時の長者鑑の番附にも立派は駁つてござるれ前さんか、事故無く名を消して仕舞ふと云ふのは、ちつと難ク敷と思ひますが、和尙何したものだらう、此時側に居りました天明寺の住職「夫はお代官の仰しやる通り、總て人別は寺に預り居りまするが、お前さんの名前を消すとは出来ません、夫よりは矢張加州へは當方から送ると云ふとに致しては如何でござります」――「……夫ぢや何うしても名前を取消すとは出来ませんかな」側より名主の藤左衛門も口を添へまして「如何にもさう云ふをしまするとは出来ません、何も好いでござりませんか、立派にお前さんの名前を當方から送るのに仔細は無いと思ひます」サアソエでございます、何うも町人の成上りと言はれまするのが辛

七十一

いのですが、夫ども強て取消すとはあらぬと仰しやりやア致
 方がございません、夫で之加賀へ乗込んだ上、下々の者に彼
 是言はれぬ様、マア金子で俗に云ふ面を張ると云ふとがあり
 ますから、さうなとして胡魔化さうと思ひますから、人別が
 脱ぬどわれれば氣の毒ではございませぬが、御馳走は各方致し
 まするが、焼物丈けはお返しを願ひます、証文の方々は悉く
 取立てまして、残らず金子で加州へ持参りたと思ひます、
 皆さん其思召でお焼物はお返しを願ひます「へーッ……」村方
 一統の者は此一言を聞きますと顔色を變へました、
 酩酊して居りますから黙して居りませぬ「オイ、權右衛門さ
 んや、折角乃公達が金子を儲けたと思つて喜んで居るのに、
 代官達は要らないとを吐すぞ、何んで人別が除けないのぢや
 除いたら夫で宜いぢや無いか、除けぬ時にや焼物を返さんけ

ればならぬぞ。「モシ、代官様、何も仔細は無ぢやござい
 ませんか、村の者一同か承知して除いたら夫さりのとでござ
 いませう、佐野屋の旦那も存志が立ち、私等も金子が儲かる
 のぢや、愈上除か除かんか、除ぬどあれば村方一同が申合せ
 て、代官の首を引除け」とソロ／＼亂暴をはじりやうと爲る
 勢でございませぬ、主藤左衛門は驚きまして中へ這入り名ア、
 皆の衆、決して負頼達は亂暴はならぬぞ「ナ、コソ、なるも
 ならぬもあるか、サア除か除んか、返答しろいと」忽ち願に
 相成つて参りました、藤左衛門五人組首め一同より先づ大勢
 を宥めまして、扱三名は一間へ這入つて相談を致しました、
 代官稻木も此件を承知せぬ時は、一時に金子を返済しなけれ
 ばならず、村方の者が願出します時は百姓一揆も起りかね
 まじきものにもあらずと、こゝに三名はやう／＼相談の上兎

も角も名前を除くことに取決めをしたが、後に銘々の迷魂に相成とも知らず、先づ以前の席へ復りまして「夫では吾郎左衛門さん、お前の注文通り人別は取消しませう」「イヤ夫は有難うございませう、夫で私も結構に思ひますから、何うぞね帳面をお取寄せの上、私の判を除いて戴き、此場でも名前を消して戴きたうございませう、是に至って菩提所天明寺より水帳を取寄まして皆の見て居る前で佐野屋の人別は取消しに及びました、跡は佐野屋治兵衛の人別に悉く切り替ると云ふ相成りました爰に至つて佐野屋治郎左衛門は、十分我が希望通りに相成りました、依つて其翌日舎弟の治兵衛を伴れ、村方一同へ廻りました、最早佐野屋治兵衛の代と相成り、其身は無籍者と成りまして、此上からは再び吉原に出掛け、我が一命を棄て、必ず怨のある奴を悉く斬つて捨て、其上にて潔よく切腹を致し

七十四

て相果てんつ、心に十分の覺悟を定めまして、二月の二日早天より、身支度に及び、在下を出立いたすことに相成りました、村方の者は追々途中まで送つて参ります。さて佐野屋の大盡様、此度はお目出度うございませう、いよく貴郎も江戸へお出に成りますれば、立派なお侍であります、何卒御出世の後、一應村方へお歸りを願ひます。▲貴郎の馬に乗つてお通りに成る、御立派なお姿が拜みたいのでございませう」様々と話しながら、天明の鶴屋といふ立場茶屋の前へ参りました、治郎左衛門は一同に對ひまして「治郎さん、いつ迄附てお出下さいませしても同じこと、此處で別れ申します、何卒お引取りを願ひます。夫れでは此處にて別れ申しませうが、何卒御機嫌よくお出成さいませうやうに「ハイ難有うございませう、何分跡の處は勝手を知らぬい治兵衛でございませう」

七十五

すから、萬事宜しく村方の衆の御引立を願ひます。〇れ氣支な
 さいますな、必ず粗末な取扱ひは致しませぬ、御安心を願ひ
 ます。」と是に至て村の衆は皆々引取りまする、治郎左衛門の
 後姿を打眺めましたが、「ア、ア何にも知らぬ村の衆、怨を擧
 したいた為めに、すでに斯様な思惑は付いたといふもの、再
 び村へ歸ることも無し、いづれ大勢を殺害をして、仕損じな
 ば御召捕に相成つて、御仕置に上るは知れたこと、定めて仕
 置に上つた其後は、死骸は村に引取つても呉れるであらうが、
 何にせよ故郷も村の衆にも、これが此世の見をさめかど、大
 膽なる治郎左衛門も、思はず涙にくれましたが、やうく氣
 を取直し、片傍の鶴屋へ這入て参りました、家内の者はこれ
 を見まして、女、オ、これと佐野屋のお大尽様でございませうか、
 御出府ですか、何卒、ア此方へた掛けを願ひます、ハイ、

「チヨイと姐さん一瓶燗けて下さい」と椽側に腰打掛け、すで
 に一杯飲まんぞ致して居りますると、此鶴屋の二階の奥座敷
 に、昨日より泊り込で居りますのは、前回に述べましたる、
 吉原の判間部阿波大夫、丸善、藤八、葛屋のお仲でございま
 すが、これは昨日吉原を朝早く出立を致して、是迄出掛けて
 参り泊り込みましたる處、今朝に至て丸善が少々腹痛でござ
 いました、其れゆゑ暫く留まつて居りまするが、佐野屋の宅
 までは最う僅といふことを聞きまして、當家で晝飯の支度を
 致して、夫れより出立をせんと心得て居りました、然るにお
 仲は二階より、能う似た聲と下階を覗き込み、見ると疑も無
 き治郎左衛門でございませうから、「モシ、」チヨイと阿波さん、
 佐野屋のお大尽が椽側に在ッしやいますよ、阿波大夫はこれ
 を見まして悦びながら、早々銘々二階から降りて参りました、

阿波太夫は眞先に前みまして、治郎左衛門の側に來り阿イヤ
 これはお大尽でございませうか、先づ御機嫌さまでございませ
 て、れ久し振りにて御目に懸りました、治郎左衛門は之を見
 て、大きに驚きました、治「オヤ、お珍らしい、阿波太夫さ
 ん、丸善、藤八、お仲さんも御一途で、何所かへ御參詣かね
 阿「中々もちまして左様ではございませぬ、實は貴耶の宅へ
 態々出掛けましたこととでございませぬ、治「へ……私の宅へ、そ
 れはまた何の用があつて……阿「サ、然う仰せられるであらう
 と思ひました、これには種々お話がございませぬ、何卒お手
 間は取らせませぬ、チョイと二階へ上りを願ひます」と
 頼りに勧めますから、治郎左衛門は心中に此奴は變だど考
 へながら、案内につれて二階へ上つて参りました、治郎左衛
 門は思ひ掛け無くも四人の者に出會ひまして、案内につれて

二階へ登り一室へ通りますと、四人は四方から取圍ました、
 中にも都阿波太夫は、頼に頭を低げ撫でさすりながら「扱旦
 那樣、實に旦那に何んと申してお謝罪をしやうやら、實に言
 葉にも出ません位でございまして、昨年の十月には結構す
 きたる旦那より身請けの相談を、彼の様な狂人が附いて居ま
 して、乱暴と言はうか、ア私でも、少し腕に覺わがありや
 ア、打倒さうとは思ひましたが、何分相手は強敵、此方は斯
 う云ふ業体でございませぬから、扣へて居りましたが、大尽、
 道は大家の貴耶丈けあつて、能う彼の時は御辛抱を遊ばした
 と、跡で皆が噂を致して居ります位、所で大尽、肝腎の八
 ツ橋華魁も、養生の彼の乱暴を見て、フツ、愛相を盡かし
 たものと見せまして、其後私共を手許へ呼んで、何うを彼の
 様な人と一途に居れば、末の見通しが附きませぬから、お前

さん達の骨折で、縁を離って呉れどとでございまして、
から貴郎、おなかさんお私なりが、マア旦那、貴郎に済ま
ぬと思ひまして、話込みました、中々養生は悪い奴でござ
いますから、容易に承知は致しませんでしたが、漸とので
金子を三百兩離縁金に遣りまして、旦那御覽下され、此通り
榮之亟から離縁状を取りました、其上華魁は貴郎が越しに
なれば、屹度之をお目に掛けまして、貴郎にお謝罪をしやう
ど、日々、越しを待って居りましたが、其後は何の御汰沙
も無く、華魁も今と堪り兼ました、榮之丞と手の切れたる
次第を、何うぞれ前途が行って、篤と詳しく此の話をし
れとのとで、夫ゆる四人が斯うして出掛けて参りました、オ
イれなかさ、お前も何んとか御挨拶をして呉れなさいか、大
盡腹も立ちませうが、今も阿波太夫さんの仰しやる通り、

華魁も日に貴郎にお目に掛って、改めてお謝罪を申したい
ど、とでござります、何うか今一應、御勘辨を下さりました、
吉原へ立寄の程を願ひます、是は華魁から貴郎へ、借にお
手渡しを申して呉れと、手紙を妾が托かって参りました、御
覽下さるませ、所で大盡、今月早く出ます筈でござりました
たが、此九善が腹痛でございまして、夫ゆる師匠なりおなか
さんに、暫しの介抱を受けて居りました様なとでござります
藤へ、大盡、御不沙汰を致しまして、藤八でござります、何
うぞ伴されたと思召して、最一度れ通ひの程を願ひます、是
が嘘でありましたら、私共四人の生命をお進け申します」と
なにか頼間なり茶屋の娘ア、四方からガヤ、怒鳴り立てま
した、治郎左衛門も暫く腕拱いて、思案に及んで居りました
が、ム、と心中に考へましたのは、随分彼奴等之面の皮の厚

い者、叔は再び乃公を連れ出して、又詐らうと云ふ、何か目的があつてうせたに違ひない、ヨシ乃公が人別を取消して無宿者と成つて居るとは知るまい、こりや一番伴されたを見せ掛けて、迎ひに来たを幸に、再び出掛けた其上にて、此奴等は申すに及ばず、吃度八ッ橋漿之函を、打止める時節の來つたかど、心の中で窺に歡び、手紙を取つて暫し讀んで居りましたが、イヤお前さん方が大勢に揃の上で、お越し下されたからは、踏更伴りとも思はれません、八ッ橋さへ其氣で居りますれば、ナニ私に諸否はありませぬが、併し此度の商賣用で江戸へ出掛ける所でござりますから、孰れ其内に改めて言原へ出掛けませう、阿夫は旦那困るんです、實は斯うして四人が、態々貴郎をお迎ひに來ました、兎も角も此儘一應……イヤ此儘と云ふ譯には不可ない、私も治郎左衛門だ、行くど

言つたら必ず参ります、阿夫ちやア彌々お出下さりますか、是から江戸へお出ましから、私等もお供を仕りませう」とやうく當家の拂ひを致し、四人の者と同道にて、其日夜に入りまして、江戸へ到着致しました、治郎左衛門は必ず参ると、約束して四人の者に別れ、通り二丁目の佐野屋の支店へ出掛けました、此方之四人吉原へ立歸りまして「阿サア華魁、此度と云ふ此度は上首尾で歸つて來ましたが、其代りに今迄の様な待遇ではいけません、此度來れば充分大切にしなければなりません」又榮さんを手許へ呼附けると云ふ様なものがあつてはなりません」と段々四人より話込みました、八ッ橋も其氣に成つて、充分手の中へ丸め込まうと覺悟を致して居ります、折しも治郎左衛門は二月七日に至り、再び吉原へ通ふとに相成りましたが、是を佐野屋の二度目の吉原通ひ、遂に

大願助を惹起しまするね話と相成りまするが、
八十四
一寸一服致

第五回

茲に佐野屋治郎左衛門は、享保四年二月七日に至りまして、再び吉原へ赴くことに相成りましたが、兼て葛屋の方には、待設けて居りましたるまでありませうから、ねなかり夫と見るより大に歡びまして、早速治郎左衛門を二階へ通しました、彼の都阿波大夫丸善藤八、是等の者を呼寄せるとに相成りました、た、三名は早速出掛けて参りました、コレは旦那様能くお越し下さりました、先日は甚だ失禮を致しました、お迎ひに出やうと心得て居りましたが、却て夫では好く無いと、差扣へて居りました、誠に今日は思ひ掛け無かれ越してございまして、私共一同は此上無き歡びに心得まする、サア萬字樓へ御

案内を致しまするから、ね越しを願ひます」とお世辭を述べるとは彼等が渡世でありまして、中々治郎左衛門に口を利かしません、孰も大切に扱ひまして、早速治郎左衛門を案内を致し、京町一丁目の萬字屋重兵衛方へ案内に及びますると、八ッ橋は兼て待設けて居りましたるまでござりますから、早速出迎ひに及び、吾が部屋へ案内を致しました、頼て治郎左衛門の側に兩手を支へ、大盡能く来て呉んなましな、定めて昨年、年の事はお腹も立ちませうが、何事も皆妾が悪いのでありんすから、何うぞ堪忍して呉んなまし、兼てね手紙で申した通り、榮之丞のとは實に愛相もこそも盡き果てました、畢竟する大盡あればこれ、彼の揚をワツと辛抱して呉んなました、何んどもお謝罪の申しやうもありませんと、ホロリと翻す一ト甲、美女の落涙男子の腸を劈くとありまするが、實に世の

中に美女にホロリとされた所は、何んども堪つたものではあ
りませせん、大抵の者なら忽ち伴されも致しませうが、治郎
左衛門は充分恨みを含んで居りますから、心の中では何を
吐す狸女、今に篤と心底を探つた其上で、吾存思を立てるや
らうと、心に思ひながら、面には顯しませず、只ニコニ
ニコ笑ひながら「治郎、オイ八ッ橋、れ前が悪いと気が附けば夫迄
のとだ、併し榮之丞を再び呼び寄せる様な事はあるまいねへ
八ッ夫は大盛が仰せなます造もありんせん、縁離状が何よりの
証據でありんす」と是に至つて一同は酒宴を催しました、
其日より治郎左衛門は八ッ橋の許へ通ふとに相成りました、
併し治郎左衛門は心に肌身と許しません、油断無く彼女が舉
動を日々に窺ひ居ります、八ッ橋も是迄と違ひ、治郎左衛
門を大切に爲るとは、其身の間夫をあしらふ如く、是迄の言

原通ひとと、天地の相違でございますから、佐野屋も大に不
思議に心得て居りましたが、或時八ッ橋は治郎左衛門に對ひ
まして「アノ大盛、貴郎に少しは願ひがあるんざますが、叶
へて呉んかまし、治郎左衛門之心中に、ハ扱は何か彼奴が
無心を吹ッ掛けるな、と思ひながらも「治ハイ華魁何のそだよ、
頼みと言ふのは「ハハイ他事でもありんせんが、主も御存じの
九重の姉さんが、此間去る大盛に身受けをされなまして、最
う此吉原には居あいなりましたが、置土産として姉さん
のか座敷を、妾が貰つたんであります、所が何うも此儘で這
入ると云ふ譯にもなりんせんで、せめて少しは啓誓普請な
らして、ならうとなら妾も當家に於て、假令半月が一ヶ月で
も、お職の華魁と言はれた其後は、大盛に身受けをして戴き、
大盛のお故郷へ行きたい望みがありんす、何うか座敷の普請

がして殿さまたいんでありんす、治郎左衛門も心中八十八に――是だ
 な、夫で乃公を再び呼出したのかど、暫し考て居りましたが、
 こいつ一番怨を晴す程が出来たわい、強ち殺して仕舞ふばか
 りが、恨を晴すでもあゝ、乃公の身の上は今と無宿者、此奴
 の望み通り、充分に普請を致し、彌々拂いと云ふ時には、此
 江戸表を跡になし、諸國武術の修行者として、飛出して仕舞
 ふ其時は、跡で此奴等はへいモドして、生涯麻を出られぬ様
 になるは必定、好し」と是に其身は覺悟を定めまして、早速
 承知を致しました、樓主重兵衛を呼びまして、彼の九重の部
 屋の容子を一一見廻りしました、治郎左衛門は四室と致し、下
 普請爲るからには修繕普請杯は氣に入らない、早速是は取段
 し、建てるからには何れも斯も新らしく、三階造りを建てよや
 る、吉原始つて華魁の部屋に、此位ひに立派な部屋は無いと

言ふ様に致してやるから、早々出入の大工を呼が宜からう
 と是に萬字樓へ出入の大工を呼まして、立派に繪圖を引か
 し、扱て普請は三階造りと云ふ注文でございます、尤も四
 方は廻廊下と致しまして、三階を三間二階は四室と致し、下
 には別に茶室を拵へ、成丈け槍を用ゐる様ど、洪大も無き普
 請に取掛りました、治郎左衛門は座敷の普請に取掛らせまし
 たが、計算の處は建上った上一時に拂ひをして遣から、材木
 其他總て通帳で取寄るが可からうと、佐野屋治郎左衛門の名
 前を認めましたる、通帳を出しまするとに相成ました、恚て
 治郎左衛門は日々に來て普請の差圖萬端を致して居ります
 が、其間に八ッ橋も、若や治郎左衛門を怒らす時は、折角の
 思惑も水の泡と、成丈け治郎左衛門を大切に取扱ひます、男
 子といふ者は兎角自惚根性の撥るものでございまして、佐野

屋も最初の内は決して此奴の計畧には罨るまいと思つて居り
ました。が、遂に八ッ橋の手管の淵に沈み込む様に相成りまし
た。が、さうも此節の待遇ではこれは大方榮之丞の薄情に引か
へ、乃公の深切が違ひて、眞に華魁が是丈け心中を立てるこ
とかど、フト迷ひ込ませては是れなれば悉皆普請の出来上ッ
た上、拂ひをしたる其後は彼を身受をして、氣樂に生涯暮し
て行かうと、思込みましたのは、そも其身の誤りでございま
した。茲に又彼の柳橋同朋町間筋の紋久一平でございまして、
一日の事治郎左衛門は番頭又兵衛に對ひまして、彼の二人の
ことを尋ねますと、又兵衛は過る日立腹せしことを話に及
びました。治郎左衛門もそれは大きに氣の毒なことだと、早
々出入を許すことに相成りまして、時々吉原へも供に伴れ
て行きます。二人は佐野屋の供をしあがら、萬字樓に来つて、

此度の普請の容子を悉く見まして、大きに驚きました。オイ一
平、大盡は格外華魁にはまり込んだと見ゆる、此奴は又末に
は何か騒動が起りさうだ、中々彼の八ッ橋が榮之丞と手の切
れさうな筈はなし、是之今のうちに我々から、一應は大盡に
篤と御見見を申すが宜らう。「大哥眞個に然うだね、これは一
つ十分御見見申すが爲だらうと、或時佐野屋へ来りまして、
奥座敷にて治郎左衛門と四方山の話をして居りました。が、時
に旦那様、斯様お事を申しますと、小瀬なことを云ふ奴どお
叱もござりませうが全体此度の普請は、何故彼の様に立派
に貴耶はおやり遊ばすのでござります。然うさね、乃公も佐
野屋治郎左衛門だ、華魁に座敷を建て、呉れいと頼まれて見
れば、満更詰らぬ普請も出来ない、焼失さへしなければ何時
々でも存るもの、道が佐野屋が注文で建てた普請だけあッ

て、又格別なもの、後來までも人の話し柄に成るやうに思ふてのこと、建てやるからにはア彼の位なものサ、大盡貴郎失禮ながら八ッ橋は寶生榮之丞と手が切れて居るとれ思ひでございませうが、私はどうも、合點が參らぬとれもひます、縦し榮之丞とはスツカリ、手が切れまして所で、彼丈けの普請は無益の様に思ひます、大概にしてお置き成されたら何んなものでございませう、出来上りました所で僅か半月か一月の職の華魁に直した其後は、貴郎がお身受をなすつてお國元へ連れてお歸り成さいますれば、彼の座敷は萬字樓の腹肥しの様に思ひます、又華魁もどうも油断は出来ぬと思ひます、後で兎や角うあつたら、貴郎の御氣性も、何の様な事にならうかと、それが案じられまして、失禮ながら私共から御異見を申上げますのです……「オイ、」

たナ、汝なとはナ、真底から女に惚れられたといふ其情を知らぬからさう思ふだらうが、乃公も斯う云ふ怖しい顔容で、彼の位を女に十分思惑を立てさせやうと云ふに、第一は眞實だ、それだから今ではスツカリ、華魁が乃公に願いて居る……ナニ案じられる、さう思ふから間違て居る、マア其証據を言て聞かしてやらう、既に四五日前の朝、乃公が歸らうとするど、八ッ橋は起て筆筒の抽斗から、乃公の衣物を出して、背後から斯う着せかけたナ、所が此衣を見る、この結城紬だ、此衣類の袂ど、彼女が着て居る襟巻といふのと、紫縮緬の中振袖、その袂を二つ合して眺めながら、何だか變な顔付をして、ホロ／＼泣いて居たんだ、乃公もそれを見て、オイ八ッ橋、何だ朝から延喜の悪い、何が悲しくつて泣くんだと、聞て見るとナ紋久、どうも嬉しい言を云つたよ、大盡物に辱へて言

九十四
 とうなら、この紫縮緬は寶生榮之丞で、主の召して居なます
 結城紬は、丁度主のやうでありんすと、斯う吐したんだ、そ
 こで乃公は催怒た、オイ華魁惚氣も大概にして置きな、寶生
 榮之丞といふ奴は、いかに面が奇麗だからと云て、紫縮緬、
 乃公を捉へて結城紬とと、餘り馬鹿にするも程があるぞ、ナ
 ヨイと怒って見せるたね、ハッ橋は恨めしさうな顔をして乃公
 を睨んだ、而も涙を翻しながら、能く聞て見るといかにも尤
 の一言、その時の乃公の心持は如何あだだと思ふ、實に何
 ども堪ったものでなかつた、餘程嬉しかつたよ、
 どうも、シテどんな事を申しました、
 云ふのは眞に妾が腹から出たことでありんす、主の仰しや
 る通り寶生榮之丞はチヨイと見ればこの紫縮緬のやうで、ア、
 奇麗なお方だと斯様に思つて迷ひましたのが妾の生涯の失策、

主之又最初チラと見た際は此の結城紬のごとく、木綿のやう
 に見えまして、アレ可怖いお顔を實は怖がつたんでありん
 すよ、併し結城紬といふものは召して居らっしゃるほど底光
 澤が出てお爲が良くてお強い品でございます、紫縮緬もか
 ッどりは華美で立派で宜しいが、此位また襦め易いものはあ
 りんせん、依て榮さんを主に留へたのも、今の主のお心が眞
 實見なまして、難有く思ひますからのことでありんすと、
 オイ紋久何うだ是丈の事が嘘に言へるか、シテ見りやア乃公
 に十分彼も心底を盡して居るのだと惚氣半分の其一ト言、
 二人は互に顔見合せ、呆れ返つて居りましたが、少時あつて
 一平は紋久に對ひ「オイ大哥、モ一何も言はないが好い、斯
 う大盡が惚氣なすつたら始末にいけない、今に事が起らな
 ければ好いが……と二人は大きに心配を致して居りますうち、

早や普晴も追々抄りまして、五月の上旬に至り全く出来致し、
 盛建具は申すに及ばず、座敷の總ての飾置何も彼も十分に整
 頓ました、是に至りて五月四日諸拂を爲し、翌五日には派出な
 る座敷開きを催さんど、萬事萬字樓に申付けまして、四日の
 早天に多額の金子を萬字樓の店頭に運ばせまして、治郎左衛
 門八ッ橋の兩人帳場格子の裡に坐り込み、前には都阿波太夫、
 丸善、藤八、紋久、一平、葛屋のね仲を始として、其他萬字
 樓の家内、孰れも拂ひ方にかゝりまして、諸拂は午時迄に取
 りに来ていこのこと、是に至りて大工手傳總て此度の普晴に就
 まして、持込みましたる其先々より代金を受取りに参りました
 がやうく午時頃には至りて悉皆の勘定が四千七百五十何兩
 といふ拂ひでございます、先づ諸拂も済ませまして、其跡に
 て五百兩といふ金子を八ッ橋に渡ししました、治郎左衛門、乃公は是

から前祝ひに、皆の者を伴れて、葛屋へ行て一杯飲むから、
 お前は此金子で、明日の祝儀をこしらへるが可からう、先づ
 五兩を高額として、其他三兩二兩一兩、或は二分と皆夫れ相
 當に行渡るやうに手當をして置いて呉んな、ハハハ畏まりました
 治「ア、重兵衛やお前はまた明日座敷開きに付て、料理万端の
 所は、成丈け立派にして呉んナ、そして廊中の藝者は朝から
 總揚にするが宜らう、乃公は兎も角今晚は引取て、明日は早
 朝より出掛けて来るから、萬事手當をするが可からうと、皆
 の者にそれく、申付けまして、治「ね仲、和女は一ト足先に歸ッ
 て、チヨイと一杯前祝の下物の手當を仕て呉れ、一長まりま
 した」ど早速お仲は飛出しました、治郎左衛門は残りの金子
 を懐中致し、都阿波太夫九善藤八紋久一平の五名を伴れまし
 て、其日の未刻過ぎより仲の丁向七軒、彼の葛屋佐治兵衛の

許へ歸つて参りました、主個佐治兵衛も早速出迎ひまして佐
 「これが大盛様でございますか、誠に今日はお目出度うござ
 います、サアどうぞね通りを願ひます」皆の者は早々二階へ
 上りました「大きに今日は皆々草臥たであらう、サア緩容と
 一杯飲んで呉れ」是より酒宴と相成りましたが、治郎左衛
 門は別段趣は動かしませんが、大きに氣くたふれを致しまし
 たと見ゆ、いつに無い酔を催しました「ア、今日は大變に酔
 が廻つた、紋久汝乃公に成代つて皆の者に侷めて呉れ」と申
 し置き、其身は表の障子を開き、二階の欄干に靠れかゝりま
 して、往來を眺めて居ります、黄昏ころ、戸外を通りかゝり
 ましたのは、萬字樓の文づかひ喜助でございます、治郎左衛
 門は之を見つけたして、二階から聲を掛けました「オイヤ、
 喜助ではないか」喜助は振仰向きまして「イヤこれは佐野屋
 九八

の旦那様でございますか、今日はお目出度うさまでございま
 す「喜助」オイヤ「オイヤ」と上つて来い「オイヤ……早速葛屋へ這
 入りまして、畏縮しおがら小腰を屈め二階へ出掛て参りまし
 た「紋久」オイヤ「喜助に一杯飲して遣れ」オイヤ「喜助さん、旦那
 のお召だ此處へ来て一杯飲ナ」オイヤ「難有うございませうが、一
 寸華魁のね使でございまして」「ハ、然か八ッ橋の使かナ」「オ
 イ、左様でございますか」「オイヤ、華魁の使に何處へ行く」「オイヤ……
 へイその何でございませう、オイヤ田町まで参ります」「オイヤ田町よ、ウ……
 シテ喜助、田町は何所だ」「オイヤ、その田町のホーホー……
 「何だ、オイヤ何でございませう、田町の方へ参りまして、
 倉橋さんといふお醫者がございませう」「オイヤ、其者が如何した、
 其先生が、モ、餘程トト年を老つて在ッしやいませう、方
 ございませう、前方華魁が禿上りの時分、吉原へ御通ひに成
 九十九

りまして、華魁の頭を撫でながら、お前も大きくなつて、この家のね、職にでもなつて、座敷が立派に出来たら、己れが祝ふてやらうと云ふた事が、華魁も子供心に肥臆がござりました、今日、今日のやうに、大盡にかく立派に普請していたいさまして、たのぞ、見せびらかしてやらうと云ふ御者でござりました、それで鳥度れ知らせに行くのでござります、然か、そりや面白、ちやア行つて来てやれ、併し此所で一杯飲んで行け、一平も一平持つて来てやれ、辛いやこれのどうも有難うございます、一平は程なく一銚子を添へ、色々肴を取りそろへて持つて参りました、「サア喜助さん、大盡のお許だ、グットひつかけて行くが宜い、これ何うも御馳走さまでござります、此の時治郎左衛門は、懐中の紙入より金二兩取出し、紙に包みまして、ソラ喜助些少いが使貸だ、これを持って行け、」

こりや何うも有難うございます、又明日は世さまにも、祝義をやるぞ、そりや何うも有難うございます、それでは今日は何かと準備がございますから、御暇をいたいます、早く行つて造るが宜い、喜助は心の中でやれ、と思ひながら、その場を下りまして、ホットト息をつきまして、「ア、一、險呑く、嘘と云ふ者はつける者でない、華魁の使に田町の方と云つた時に、お化の顔色の變つたのは驚いた、若しも寶生榮之丞の方へ、手紙を持つて行くと云ふやうな事が知れたら何うだらう、うまく切り抜けたな、何と云つてもお化の大盡だ、鳥渡與れる金子が二兩だ、はたの奴は斯うは行かない、と大きに悦びながら、かの五十間の半途に掛つて参ります、東側に鳥渡入口がございまして、細の腰懸が掛つて居ります、軒下には網張りの行燈を掛けまして、即席御料理

と記してございませ、その前を通りかゝりますと、内より
細の暖簾をまくりまして、オイ喜助、鳥渡まちな」と唐突に
聲を掛けられましたので、喜助は驚き振りかへつて見ます
と、帯間の紋久でございませ、オヤ紋さんですか、なんぞ御
用でございませるか、紋マア宜い、鳥渡はいりませ、へー鳥渡急ぎ
ますので、紋マア宜い、鳥渡一杯やるんだから、はいりなと云
ふに、喜「へーそりや有難うございませ」と意地の汚ない奴です
から、内へはいつて参りますと、鳥渡腰掛を致してございま
そ、やがて吸物やお酒なんかを持って参りました、紋久は一杯
飲みながら「喜助鳥渡飲まないか」喜助は紋久の顔をプロ
口眺めて居りましたが、紋「さん妙ですね、何が妙だ、イエ今
私が葛屋の二階で、大盃に一杯よばれて居ましたとき、お前
さん、あの奥の方で大勢さまと同じやうに、飲んで入らつし

やいましたね、紋「さうよ、それが何時の間にか此所へ来なすつた
んだ」紋久は笑ひながら「一寸大盃の目を忍んで、裏梯子か
ら下りて、此所へきてちよんのまで、一杯飲むのが楽しみだ
よ、へー妙ですね、お前さん此所へ来て飲めば、金子が入りま
せう、紋「さうよ、先方でみんなに御馳走の有る所で、飲んで入
らつしやつたらたいでせう、それに何故斯う云ふ所に来てお
飲りなさるんです、紋「それだからいけない、お前の目から見る
と帯間杯と云ふ者は、人様の前で要らんお世辭を使つて、頭
計りびよこすかさげ、たいの酒を飲んで居れば、アー好い渡
世であると思ふだらうが、あの位また詰らね商賣はない、い
くら飲んで思ふだらうが、その酒は唯理に入ると計りだ、
そ、云ふ時は、鳥渡氣振りに、たとへ此様なつまらない香で
も、己れが錢を出して飲むと思へば、これ程楽しみな事はな

いんだ、だから大盡の目を弱んで、一寸斯して飲で居るんだ、
 幸へイ太い遊ひですな、私等は又錢を出す酒より、無代の方
 が餘程旨いんです、ユ、ちやアマア貴耶に馳走るとしませう、
 併し又遅くなつたら華魁に叱られますから、是で御免を蒙り
 ます、
 助、ね前何所へ行くんだ、
 の使ひに何處へ行くんだよ、
 らつしやつたらう、田町の食橋さんと云ふ……
 人を馬鹿にしなさんな、へ、へ、へ乃公を矢張り化大盡の
 様に思つて居るか、へん其様などは判り抜いて居るぢやアね
 へか、お前が彼の時、田町の寶々と言つて、口籠つて居たが、
 アリヤ田町の寶生榮之丞の所へ使ひに行くんだらう、
 か、そんなとはございませせん、
 人を野暮にしなさん

んな、乃公は何も聞いたつて、大盡に話を爲るんぢや無へ、
 宜いぢやねへか、匿さす言つたら何うだい、
 さん、盆の上は判つて居ますか、
 振りで大抵判つて居るから、乃公が尋ねるんだ、
 ひますが、決して大盡に言つて呉んなさんな、
 でございます、
 へーさうでげす、一寸乃公に見せて呉れないか、
 やア不可ないや、華魁の手紙を見せて何う爲るんです、
 見たつて宜いだらう、
 く懐中より手紙を出しまして、
 て能々見ますと、榮さんまゐる高より、
 此たかど云ふのは八ッ橋の幼名でござりまして、
 考て居りましたが、
 手紙を乃公に渡して呉れ無いか

「エーッ……冗談ぢやございませぬせ、華魁の手紙が取れますかい、そんなとが知れたら、どんなに華魁からお目玉を頂戴爲るか知れぬ、第一に萬字樓に居ると出来やアしない、そりやお断りでござす、へ、れ前も野暮な人だねへ、人に取ったッてなとを言ッて何う爲る、幾等も言ひ譯はあるだらう、是から直に歸ッて、試みに華魁濟みませんが、土堤へ掛ッて來ましたら、泥酔漢が二三人で、喧嘩をして居りましたから、側を通らうとして、ツイ手紙を取落しました、所が下に水溜りがござりまして、其上から足で踏みやアがッて、涙茶苦茶にしました、無く側三谷堀へ、投込んで仕舞ひました、何うか最う一本れ手紙を、書いて頂戴と云へば、只華魁に叱られる丈のとだ、さうすりや決して知れる支支のあからう、何うだ喜助、そりやマアさう言やアさうですが、紋さんお前

百六

百六

さん、又此手紙を買ッて何に爲るんだ、さうよ、實と少し呪に爲るんだ、へ……華魁の手紙が呪になりますか、成るとも、屹度宜い呪になるんだ、へいさうですかね、併し何程に買へます、セ、マアさうよね、手前が賣ッて呉れりや、乃公、黙ッて一兩やらう、喜、い、一兩、そいつア有難い、ぢやア賣りますか、ね、紋さん、決して言ッて呉んあさんな、誰がそんなとを言ふ奴があるものか、第一頼問でありながら、文使を胡魔化して、手紙を買ッたと知れて見れば、乃公も吉原へ來るとが出来ない、乃公も言はあいが、れ前も決して鏡舌りや爲まいな、と懐中より一兩の金子を取出し、喜助に渡しました、喜助は大に歡びまして、早速跡へ取ッて返しました、華魁に程なく謝罪を致しまして、又々一本の手紙を書いて貰ひ、是を持って彼の寶生榮之丞の方へ参りまするとに相成りま

百七

した

第六回

百八

跡に紋久は占たりと、早速當家の拂ひを済まし、ソツと葛屋へ歸つて参り、裏梯子よりノコ上ッて参りますと、治郎左衛門の紋久の姿を眺め「ヤイ紋久、貴様は何所へ行て居たんた、イヤこりや大盡、誠に済みません、一寸ちよんのをくはしました、治郎左衛門の悪い奴だ、最う乃公歸らうと思つて居るのに、手前が居ないから、先刻から探して居つたんだ、ヤ誠に済みません、恐れ入りましてございます」此所にて彼の太夫を首め、丸善藤八が居りますから、彼の手紙のとは申しませず、さうかう爲る内、治郎左衛門は「オッ、大盡、先刻のち掛けました、此機を幸ひと紋久は「オッ、大盡、先刻の

詫に此紋久がお供を致します」と早速前に立ッて案内をして、長廊下を下へおりました待ッて居ります、治郎左衛門の雪隠を済まし、側らの手洗鉢で手を洗ひ、以前の二階へ上らうと致します、此時紋久はソツと佐野屋の袂を押へまして、小聲にありながら「モ、大盡、是だから私が華魁の部屋に御普請は、大概が宜しいと言つたのでございます、實は先刻より手紙を取らうが爲に、餘程苦心を致しました、先刻喜助の言葉つき、何うも合點がいかにと思ひまして、五十軒へ先廻りをして、腰掛茶屋で一抔飲みながら、斯様斯様に計ひましてござります、彼奴は元來愚な奴と思ひましたから、旨く胡魔化しまして、八ッ橋の手紙の此方へ巻上げましてござります、之を御覽なすつたら、實生と手が切れて居るか、切れて居ないか、能く判りになる道理でございます、御覽なす

百九

いまし、榮さん参るたかより、此たかど申すのは華魁の幼名
 でございます、よもや筆跡もふ見覺わがございませう」とい
 ッて手渡し致しました、治郎左衛門は一目見るより、心中に
 ムーア一しりましたと思ひましたのは、今日の拂ひ萬端を濟ま
 せぬ前ならば兎も角も、勘定を濟ました其後でございます、
 此時治郎左衛門の心の中如何でございませうか、暫しの間
 は手紙を見詰め、無念の切齒を致して居りましたが、胸に一
 もつ莞爾しおがら、紋久を打見やりまして「ハ、ハ、ハ、紋久、
 貴様は大層嫉妬深い奴だ、假令手が切れて居やうども、此度
 の普請をこれ見よがしに、己から立派にして貰ったから、見
 に来いと云ってやつたのだらう、何も手紙位ぬ遣つたッて宜
 いだらうぢや無いか、マアイ一貴様の親切と判つて居る、手
 紙は乃公が貰つて置くよ」大盡、兎も角も御覽なすつたら如

何でございます、治「ハテ好いと云へば、乃公に呉れと夫なり織
 にしまして袂へ捻込みました、紋久はガツカリ致し、是でも
 お目が覺ぬかど、實に力を落しました、治郎左衛門は「マア
 来い」と其儘以前の座敷へ立歸りまして「ア—アねなか
 今日は大層酔酩をしたよ、最う日もズツブリ暮れたから、駕
 籠にさう言つて呉れ、今宵は早く歸つて休んで、明日はまた
 早くより来やうから、左様でございますか、畏りましてござ
 います」と早速三挺の駕籠を申し附けまして、紋久一平を供
 に駕籠へ打乗ることに相寄りまして、孰れも大勢の者は、大門
 口迄見送りをしたが、左様ならば大尽、明日は必ず待ち受
 け申します」と早くお越しを願います」と皆々の辞を背後に
 聞き、三挺の駕籠を急がせながら、其夜の戌刻頃には至ッ
 て、通町二丁目の、佐野屋の店へ立歸つて参りました、紋久

百十二
 は怨籠より飛出しまして「へー旦那様のお歸りでござります」
 此聲に宅内から早々奉公人は、表戸をあけて飛び出し「イヤ
 こりや旦那様、お歸りでござりますか」治郎左衛門は怨籠よ
 り出でまして、早速奥へ通りました。治郎左衛門は「へー
 貴様達と彼の怨籠にて、柳橋へ直と歸るが好い、併し明日
 はナ、宅から衣類を若換へて行くのも、何んだか体裁が悪い、
 ア、又兵衛、乃公の明日着やうと云ふ衣類は、最う出来上ッ
 て居るか、へー出来上りまして、奥へ直してござります」治
 うか、此方へ持て来い、夫ではナア紋久、手前の宅迄之を持
 て行て置いて呉れ、さうして明日の五月節句のよだから、乃
 公も奉公人一同へ、一杯飲ましてやりたい、盃が濟んだら直
 手前の方へ出掛て行くから、迎に來るには及ばぬぞ、好いか、
 さうして一平は紋久の許へ出張て居るが好い「イヤ委細長り

百十三
 ましてござります、左様ならば大尽、最うお早くお休み遊
 しませ、ね暇を戴きます」と兩人は早速己が宅へと引取ま
 した、應て治郎左衛門は奉公人に吩咐、奥の一間へ床を
 延させました、番頭の又兵衛、治郎左衛門の前へ参りまし
 て「又旦那様、アお目出度ござります、首尾能く御勘定
 も相済みましてござります、治郎左衛門、ア何うやら斯うやう
 拂ひも済ました、ア明日の朝の祝は、萬事用意は宜からうね
 又「へー何も斯も料理屋へ、申附け置ましてござります」治
 うか、それえ、御苦勞であつた、又夫では最うお早くお休み
 なさいまするやう、治郎左衛門、何うか戸締りをして、
 店の者も皆んな寐かして下され」と遂に治郎左衛門は床へ入
 り枕に就きまして、グツと一寐入り寐込みました、不圖
 夜半過ぎに至り目を覺ました、四方を窺ひますると、家

内の者は残らず寐入り際、シーンと致してございます、治郎左衛門はソツと起上りまして、彼の衣桁に掛けたる衣類の袂に手を入れました、宵の程紋久より受取った、彼の手紙を取出して紙を延し、行燈の明を揺立てながら、やうく開封に及びました、其文言に

一筆しめしあげまわらせし、左様いへばいつぞやより主さまと申合せし通り、彼のさしきはやうく出来あがり、明日は立派なる座敷びらきを致させ候事に相成り申しし得ば御安心被下たく、何卒佐橋船橋に申付け置き候間、裏梯子よりひそかにねしのび被下たくねんじあけまわらせし、尙御約束の通り兩三日のうちに、土堀にておん待受けの上、彼の化物は主より御退治被下たく、此事くれぐれも願ひ申しあげまわらせし、申わけたきことはやまくにはおは

崇り来るか、斬り殺すからには一人二人の面倒なり、屹度恨のある奴ばら、一人も残さず殺し盡して呉れんと睨み詰めたる其顔色、恐ろしきと言ん方なく、心に充分の覺悟をさめまして、やうく一刀を鞘に納め、治郎左衛門は枕に就て其夜の臥しました、早や鶏鳴曉を告る頃はひと相成ました、ニ一佐野屋の宅には番頭手代は申すに及ばず早くより起出でまして、早速朝祝ひのございまして、出入の香屋より持運びまする焼物其他種々の物を手當致して居りましたが、店に新じき暖簾を掛け奉公人は何がさて端午の節句のございしますから、此上も無き楽しみと心得居ります、甲斐くしくも床を上げまして、食事の支度に掛かつて居ります、治郎左衛門も早くより起き出でまして、手洗をつかひ、神佛への禮拜を済まし、早や膳の前へ向ひました、番頭又兵衛首り

し得共、何分いそがしき折からゆゑ、萬事御目もじの上
精しくお物語り申あげたく、あらく

「よ、――」暫しの間は手紙を持って、涙に暮れましたる治郎
左衛門、扱は紋久の言葉の通り、乃公をこゝ迄執事をツたか、
おのれ八ッ橋榮之丞、今に思ひ知らして呉れる」と齒をバリ
くど噛みしめまして、男泣きに及びました。素より其身
は無藉者、我身一つの命にて、必ず怨ある大勢を殺し盡し呉
れんど、床の間にあつたる村正の一刀、握るより早く床の
上にドツかど座し、スラリと計り斬拂ひに及びました。鑄元
から切先迄、目叩きもせず暫しの間は観入つて居りました。が
「ア、ア、世の中に村正程恐ろしい刀の無い、必ず我一代に
一度は崇るぞよと、師匠の言葉の無ならず、明日の我身に

手代小僧下女に至る迄、何れも其樹へ列りました。纏て治郎左
衛門より盃を舉始めます。「サテ今日は皆の衆や目出度日であ
ります。又旦那様結構な天気でございます。……」又兵衛
衛どん、れ前から始めて、皆の者へ盃を廻して下され。又難
うございませう」と願番に盃を廻します。治郎左衛門は又兵
衛首め皆の者を打眺め、アア己の様な者でも主人と思へばこ
そ今迄仕へて呉れたるか、併し是が現世の顔の……をさめであ
るかと、思ひますれば何んと無く急り来る涙を目に溜めかね
ましたか、ホロリと翻す一ト筆、此体を目早く見附けました。
番頭の又兵衛、又旦那様、貴郎は何やらお涙を翻して居らつし
やいまするが、何うかなさいましたのでございませうか。イヤ
ア、何うもしいないが、ア又兵衛考て見れば馬鹿々々しいと
思つてねへ、佐野屋治郎左衛門と云ふ奴も随分馬鹿な奴だ、

今日も又吉原で派手な遊びをして、願いで居るかと是から行
た跡で笑ふ奴があるかど、ツイ金子の冥加を思つて見れば、
勿体ないと思つてナア又ハ、御元談計り仰しやります、人
間は沈香も煙けば屁も放るが宜しうございませす、餅ける計ぢ
やございませせん、ね使ひなすつた後にや又幾等も餅けるとか
ございませす、併し旦那様兼てのお約束通りでございませす、今
日は是非私に供を願たいでございませす、イヤ尤だかねへ又
兵衛、今日は堪忍して呉れ、又「何故でございませす、治郎公人
は皆な今日明日を樂みに遊ぶだらう、お前の店に叩へて居て、
萬事他の者を遊ばして呉れないと困るぢやないか、ア今後改
めて窮にお前を連れて行くから、今日の所は宅の番をして皆
の者を快く遊びにやつて呉んな、又左様でございませすか、私
又今日お供が願へますと樂んで居りましたが、夫では何う

百十八

でもれ供を致すその叶ひませんですか、夫あら何うも致方が
ございませせん、とアツく小言を言ひながら一盃飲んで居りま
したが、早くも食事の了りまして、夜もスツカリと明け渡り
ました、治郎夫ではホツく出掛けやう」と治郎左衛門は薩摩上
布に黒緋の羽織、筑前博多の帯を締め、懐中には用意の金子、
彼の村正の一刀を腰に佩み、戸外の方へ出掛ながら「夫では
又兵衛、行て来るよ」と一言を後に残し戸外へ出ました、最
尚未練が残りまするか、振返り見る佐野屋と云ふ暖簾も、最
早今世の見をさめど、名残惜しくも我家を後に、彼の柳橋な
る紋久の宅をさして出掛けますといふ、チヨイと一息つ
ぎまして……

第七回

茲に柳橋同朋町紋久の宅では、早朝より家内の者は起出でま

百十九

して、一平も来ッて相待ち居りまする、所へ程無く治郎左衛門と出掛けて参りましたが、夫と見るより、紋久一平は戸外へ飛出しまして、是は大盛お早うございませう、本日お天気が宜しく結構な都合でございませう、サア色うぞお遣入り願ひます、案内に依て治郎左衛門は奥へ通りませう、紋久の女房は茶煙草盆杯を運び出しまして、庭に下ッて兩手を支へ、是は佐野屋のお大盛様でございませうか、毎々良人が御最負に相成りまして、有難うございませう、今日は又結構なお座敷開きでございまして、ね目出度様でございませう、是は紋久んの御家内か、毎度色々御厄介を掛けまして、又今日はお那隠をしますねへ、何う致しまして、未だお早うございませうから、御緩りと遊ばしませ、コレ紋吉、お前此處へ来て旦那様に御挨拶をしなよ、九歳位なる男の子でございまして、治

郎治衛門の側へ来ッて兩手を支へ、是は旦那様でございませうか、毎度お父さんが御最負に相成りまして有難うございませう、オ、息かな、ハ、可愛い子だね、名は何んど云ふ、イ紋吉と申します、何歳だ、九歳でございませう、さうか、大きくなッたら一人前の商人になれよ、けつして箱間と云ふ様な渡世を爲るんぢや無いよ、側で茶を入れて居りました紋久は、之れを聞きまして、イヤ最う旦那、其の様なことを仰しやッて下ださるませいで、好い加減に此奴は、親に向ッて理屈を申します、箱間なんかと云ふ渡世は、孫子の末迄もさせるもんぢやございません、治郎左衛門は笑ひながら、紙入より些少の金子を取出して、サア是は今日のお小使ひだよ、お父さん、旦那様に折様なものを戴きました、そりや何うも有難うございませう、併し旦那様、最うホチキ、お出掛けに

なりましては如何でございますか。治「サアさうしやう、乃公の着物を出して呉んな。紋「へい」と早速昨夜預ッて歸りました。彼の風呂敷包みを解き、中より薩摩上布白の蚊絆を取り出し、筑前博多の帯を締め、上から黒緞の羽織を着用に及びました。只今迄着て参りました薩摩上布と緞の羽織、或は博多帯、紙入、之を相當の直段に積りまして、二つに分けました。治「オ、イ紋久一平、二人「へい」乃公が是迄着て来た此衣類に帯を添へ、又羽織はかうして紙入を添へて置かう、何方なりと抽籤をして、二人が分取りにするがよい、れ前達に進るから。治「そりや、何うも、二平、何方にする。左様ですなへ、旦那のお召物も結構だが、何んならぬ羽織も頂戴致したいね。紋「そんなに慾張る奴があるものか、ちやア抽籤にしやうと、二人は早速籤引に致しました。旨い、私が衣類と此帯を頂戴だ。治「夫は

や私は紙入と此お羽織を戴いて置かう」と二人は一禮を述べ、側に直しました。治「時に紋久、太いとが出来たんだがね。治「何んでございます。治「何時も毎歳五月の節旬には、私は朝早く當地を立って、下總の成田の不動へお参詣を爲るんだ、所が本年は八ッ橋の座敷開きで、勿体無いがコロリと失念をしたんだ、今朝やうく思ひ出して、今に成ッて参らないと云ふのも何んだか、氣に掛かつてならない、何うせ吉原へ行けば、今日は座敷開きのどだから、只だ大勢が集ッてガヤク云ッて飲む計りのとだ、併し私が行かないと云ふ譯にもいかす、又成田の方も捨て置くの氣掛かりであるし、いッそお前達二人が私に成代ッて、参詣をして呉れないか、二人は頭を掻きながら「へい、夫は何うも困った次第でございます、御名代は結構でございますが、實は今日のお供を榮んで居り

ましたので……「イヤそりや尤もだが、
 假令三日掛からうが、五日掛か
 らないが、二人の花は附けて置
 いて遣る、又名代と成ッて行
 くからには、序に芝山の仁王様、
 或は佐倉へも廻ッて来るが
 好い、先づ旅費は日一兩と見て、
 二人前に五兩宛、あれば澤山
 別段に二十兩はり込で、一人前
 から、夫で何うか名代を勤めて
 貰ひたい、二十五兩宛、前邊に
 進げる
 でございませ、ねへ一平、夫丈の
 お手當を頂戴して、成田へ
 参るの何よりのとよ、一平も大
 に歡びまして、一夫ぢや早速
 御名代を勤めるとに致しませう、
 夫を聞て私も大に安心した、
 ぢやア私が此所に居る内に直と
 支度をして、機嫌よく出立を
 して貰ひたい」と言ひながら懐
 中より胸巻を取出しまして、
 金子五十兩を兩人の前へ差出し
 ました、二人は大に歡びまし

て、之を戴きました、夫ぢやア一
 平、れ前も宅へ歸て早く
 旅の支度をして来るが好い、其
 内紋久ッコに支度を致し
 ました、程無く一平も出掛けて
 参りまして、「ぢやア大哥行か
 う、旦那吉原も結構でございま
 す、今日の天気はアア、
 成田へ参詣も有難いとでござ
 います、アア差詰私に北八
 と云ふ役廻りが、太いねへ、夫
 ぢや此紋久は枳面屋の彌
 次郎兵衛か、「アアそんなものだ、
 顔が能く似て居るから、馬
 鹿なとを云ふな、二人之歡びな
 がらも、出掛けんと致します
 る、治郎左衛門は之を呼止めま
 して、「是に一兩あるから是を
 包んで私の名前を認め、護摩を
 わけて貰ひたいんだよ」と渡
 します、「アア宜しうございま
 す、スルと向ふから護摩札が下
 るから、夫と大切に持て歸て
 呉んか、アア併し僅な旅と雖
 も、男子と云ふ者は敷居を外へ
 出れば、七人の敵がゐるとや

う、又人聞は老少不定、かうして居ても何時迄の様かと思ふ、
 るかも知れない、随分氣を付けて行くが好い」と何んとも無く
 治郎左衛門の容子が變でございませうから、二人は顔を見合せ
 まして「旦那様、何うか斯う氣に掛りさうなお話でございま
 すが、一寸の間でも別れ申すのが、悪い様に心得ます、
 貴所も御如才はございませう、吉原へお出になりました
 ら、成丈大酒を召上らぬ様、氣をお付け下さりませう、
 ハ、ハ、イヤ巳の方は氣支仕なさるな、阿波太夫をはじめ、
 九善藤八も附いて居るから、早く行て呉んか」と口には言へ
 心の内、是迄此奴等二人は、日に忠義を尽して呉れたるも
 の、別段成田へ用向きはありませんが、若し連れて参つて、
 斬込みの節、止めだてを致されては刃金、裏へ廻り、怪我過
 失があつてはならぬと思ひましたゆゑ、治郎左衛門は助けて

遣たいと云ふ思惑から、斯く取計ひましたので、二人は左様
 ありと存じませず、早々同朋町を出立なし、成田をさして
 出掛ました、跡には直に一挺の駕籠を言付まして、治郎左衛
 門は家内の者に別を告げ、吉原として急がせました、最早大
 門口には、万字樓の若い者、阿波太夫を始め大勢の者出迎に
 及んで居りましたが、是はお大盛様でございませうか、早
 いお越でございませう、先刻よりお待受申して居ります、
 、皆の者出迎か、それは大きに御苦勞直と此儘万字樓へ還
 て呉んナ長まりましたと銘々附添ひ万字樓へ急いで参りまし
 た、尤も今日は座敷開きの當日でございまして、新たに建て
 たる三階は、治郎左衛門の来りませう迄は、誰一人として入
 れません、主個の重兵衛夫婦を始め皆々治郎左衛門八ッ橋を
 案内致しまして、彼の三階へ上つて参りますと、山海の珍

味種々取揃へ、吉原の遊者は總揚げと致しまして、大層な宴
 會を開きます、三階の正面には治郎左衛門八ッ橋の兩名列
 びまして、其他大勢の取巻の者、今日の目出度き座敷開きを
 祝しまして、彼是れ午時過まで此處に大酒宴を催し居りまし
 たが、午後よりは座敷を更めまして二階の方に降りて参りま
 した、此處にて又々酒宴と相成りまして、夕景前より四方に
 吊したる硝子の燈籠に燈火を點け、座敷には數多の燭臺を點
 けならべまして宛ら万燈の如く、夜の景色を茲にあらはす事
 に相成りましたが、治郎左衛門は豫て心に存念があり申す
 から、飲む酒も何となく理に入りまして、日没よりソロソ
 居眠を催しました、八ッ橋と熱々此容子を見まして「オヤ
 大盛、主は如何か爲なましたの治、イヤ華魁ア、大層草臥たど
 見の非常に眠いのだ、モ、是迄勤めりや可かるう、阿波太夫

とうか乃公の名代に、汝が此處に居て、皆の者に緩容飲まし
 て遣つて呉れ、華魁、ヤア行て寝やう」八ッ橋も承知致しまし
 て、治郎左衛門の手を執り「左様なら部屋へ入ッしやいます
 るやう……アレお險なうございますよ」佐野屋は賸眼致しなが
 ら、下座敷に降りて参りまして、廊下の中央に來りました治
 ア、好い心持にソロソロ微風が吹て來た、何だか顔がニチャ
 くして不可ない、オイ左橋「左ハ、イヤ、チヨイと手水を使ふか
 ら、盥に水を入れて來て呉んな、長まりました」と番頭新造
 の左橋は一つの盥に水を汲み、廊下の此方に置きました、治
 郎左衛門は其處に坐り込で、頓て手水を使つて居りますと、上
 では二階の欄干より阿波太夫始め、皆々階下を見て居りまし
 たが「オヤお大盛、未だ御就枕ではございせんか」此聲に
 治郎左衛門は振仰向きまして「オ、阿波太夫、乃公には介意

はす、モツと飲むが好いぞ」と云ひながらも居眠の体、少時
 すると又欄干の方を見上げました、彼の軒頭に吊りました
 燈籠の明りにて、盃の中の水に二階廊下の影が、明々と映ッ
 て居りますから、是れ僥倖と治郎左衛門、其儘八ッ橋の膝に
 靠れ、片手を板の間に突きまして、居眠を致して居ります、
 前なる盃を引かんと致しますと、「イヤ左橋、介意はぬく、
 其儘盃とけ、モツ一遍使ふからと、吾は寝た振りをして、盃
 の中の水を時々見詰めて居ります、八ッ橋も大きに困りま
 したが、片手で治郎左衛門の背中を撫ッて居ります、其内背
 後を振かへり、一寸目で仕方を致しますと、左橋船橋勝山
 もソツと二階へ上りました、かねて夕景の頃はひより、喪口
 から忍び込んで居ります、彼の榮之丞は、喪柳子より二階
 へ上ッて参りました、治郎左衛門の居りました席に着き、口

は利きませんが、阿波大夫などに頼りに酒を侷められて居り
 ます、其うち少し酔が廻ッて参りますと、彼の欄干の方に來
 りまして、階下をソツと覗き込みました、八ッ橋は頼りに
 治郎左衛門の背を擦ッて居りますので、榮之丞も疾く化粧を
 寝かして置て、此處へ上ッて呉れれば好いと思ひました、
 紙をまるめ八ッ橋を目かけて打付けますと、華魁は振仰向き
 之を見まして莞爾笑ひ、今顔を出しては不可ない、云ふと
 はならず、頼りに目で仕方を致して居ります、佐野屋は水に
 映る榮之丞の姿を見まして、「ム、ウさては來て居るナ」と思
 ひましたから、唐突に仰向き二階の方を睨付けました、榮之
 丞はハツと驚き、顔を隠しますと、八ッ橋は南無三失策た
 と、有合ふ團扇を取りまして、治郎左衛門の天窓を押へんと
 致します、治「オイ華魁、何をするのだ」「ハイ、主の頭に蚊がと

まるのでありんすよ。治「ハ、ハ、ハ、然うか、甚く居眠ッたど見は
 るナ、サア部屋へ行って寝やう」とやうく、に起上りまして、
 彼の新たに設けました部屋に通ります。座敷の中央には
 立派なる蚊帳を吊てあります。尤もど白絹に墨繪の秋の七草
 を描かせ、緋縮緬の縁を取りまして、四方に之銀無垢の環を
 附けまして、此の蚊帳一張にても凡そ百五六十兩は大丈夫要
 つてあらうといふ、其他座敷の飾装などは實に美麗な事に
 さいまして、黒塗の亂れ箱には新たに拵へました、桃色縮緬
 に背中は白抜にて八ッ橋に萬蒲形を現はしましたる、お揃ひ
 の蓆巻が入れてございます、之と兩人手早く着換へましたが、
 扱帯をべめ、其儘蚊帳の裡に這入ります。治郎左衛門は
 「華魁、何だか今晩は大變に草臥か出たから、暫く寝かして
 置いて呉れ」とクムリと向ふを向て寐て仕舞ひました、八ッ橋

は何分二階が氣に成ッてなりませんが、今夜は大切の協合と
 思ひますから、側に寐ながら頼りに治郎左衛門を撫で擦ッて
 居ります。治郎左衛門も他愛なく寐込んだものか、躬をか
 いて居ります。其うち追々夜も更けわたりまして最早大引け
 前ども相成りなした。何分治郎左衛門は能く寐込んだもの
 と見ゆまして、更に正氣がございませぬ、八ッ橋はやうく
 の事でソツと蓆床を抜け出でまして、此方へ來ります。と、
 屏風の外には禿の繁路が居眠りながら控へて居りましたが、
 之を呼起しまして「ハ、コレ繁路お前は、大盛のね側で少時横にな
 ッて在いでよ、若し大盛が目を覺ましたら、妾は便所
 にでも行たど云ッて、直ぐ二階へ知らしにれ出で」と己れの
 代りに彼の繁路を吹替に入れ置きました、其身はソツと二階
 へ上ッて行きました、繁路之跡に代ッて蚊帳の内に這入りま

したが、治郎左衛門の側に横になりながら、ツツと其處に寐
 て居ります。モウ其の内に大引となり、殿多の藝者、都何
 波太夫、丸善藤八、萬屋のお仲も、皆それぐ暇を告げまして
 萬字樓を引取りました。何んもなく四隣も深く致して参り
 ます。頃ほびに、治郎左衛門は時分は好しと、目を開き此方
 を振り返ります。側には居りました。繁路は「オヤ大盡か目
 覺でございますか、華魁は只今便所に参りましたから、一
 呼んで参ります」と出掛けやうとするを「待く決して呼
 びに行くには及ばぬ、繁路は代理か、ア、汝などは一向罪
 の無い者だ、幾才になる、ハ、十四でありんす、ハ、ハ、
 から此吉原へ来たの、十一の年から来て居ります、何故に賣ら
 れて来たのだ、ハ、ハ、親父さんが年貢の金子に迫りまして其故
 當家へ賣られて来たのでございます、治郎左衛門か、斯様な處へ

来る者は、孰れ親の爲とか主の爲に賣られる者が多いねへ、
 併し繁路、汝などはまだ一向罪の無い者だ、是から成長して
 一人前の華魁に成つても、必らずハッ橋の様な身の行状は見
 習ふなよ、又ハッ橋といふ名も決して附けるナ、汝は助けて
 遣るから、乃公が出て行ても、必らず帳の内を出ることはな
 らぬぞ、ア、此金を小遣に與れて遣ると枕邊の紙入より五兩
 の金子を取出して、繁路に遣りますと、子供ながらも大
 きに悦びまして、有難うございます、したが大盡、一應華魁に
 報さないと叱られますから……「ナ、決して介意ない、此處
 に寝て居ろ」と繁路を寐かし置き、其身はツツと蚊帳より出
 て、懐中致しました、衣類を着かへ、帯引ひめ、羽織は袖褶みどし
 き締めまして、麻巻を脱ぎすて、彼の扱帯を捉て十分に腹部に巻
 て、懐中致しました、其儘足背を忍び此座敷を立出でながら、

第 八 回

おのれッ今にどうするか、待て居れど、二階の方を覗めつけ
ながら、表の方へ出掛けて参りました、

治郎左衛門はやうく廊下を急ぎまして、表二階の段梯子を
下からノコノコ上って参りますと、傍に下足箱を据ゑまし
て、其前に小室がございます、これは遣手部屋と見ゆまして、
室内を覗き込んで見ますと、遣手のおまさが今蚊帳を吊り
まして、寝やうと致して居りましたが、人の来る物音に「誰
だよ上って来たのは……」と言ひながら振り返り見て「オヤ
大盡でございませか、マア何の御用で斯様お處へ入ッしやい
ました、イヤれませ、乃公は是から歸るから、一寸腰の物を
出して呉れ、何う成ったんでございます、ナニとどうも仕やア
しない、明日は商賣用で是非宅に居なければならず、其故華

百三十六

魁にさう云つて是迄来たのだ、デモ貴郎、今晚これ座敷開き
の當夜でございますから、お泊りなさいまして、夜が明けて
かられ歸りなすつたら如何でございます、イヤ然うはして居
られぬ、何分歸らぬいと都合の悪い事だから「それでは華
魁が承知でございますか、知れたとよ、八ッ橋に然う云てお
るんだ、デモ貴郎、大引過ぎでございますから、駕丁も起き
まいと思ひます、イヤ、乃公が直に行つて、叩き起しやア起
さぬとばかりはない、一寸先方まで誰かに送らして呉れ、然うで
ございますか、とやうく預り置きましたる、村正の一刀を
取出して渡しますと、治郎左衛門は腰に佩み、段梯子をノ
ソリノソリと、降りて参りました、おまさは店の方に來りま
して「金さん、喜助さん……オヤ兩人とも寝て居るのかへ、不
可ないぢやアないか、不寝番が寝る奴があるものかね、不

百三十七

きよ、此様に驚きまして二人の若者「へーこれはお大盡でございますか、何方へ行ッしやいます。」「オ、喜助、大儀だが一寸駕籠甚まで送ッて呉れる、今ッから歸るのだ。」「へー夫りや大變でございます、モウ餘程晩うございますから、夜が明けてからに歸りなすッては如何でございます。」「イヤ、直に歸るのだ、面倒だが一寸其處まで送ッて呉れる。」「へー畏まりました、オイ金藏、乃公一寸行ッて来るよ、跡を頼むせ」と言ひながら方字樓のフラー提灯に燈を貼けまして、金藏は店庭に飛下りまして、大戸の門を外し、入口を開けますと、治郎左衛門は喜助に案内をさせ、戸外の方へ出掛けました、れまさと入口まで送ッて出まして「それでは大盡、どうぞお早くね越しを願ひます。」「治、ア、最う寢るよ。」「左様なら御機嫌よう、治郎左衛門はフラー、仲の丁差して出掛けて参ります

る、闇の夜に吉原ばかり月夜かゝ、と云ふのもホンの甲冑のうち、斯く大引過ぎと相成りますと、何れも印行燈を引きました、深くと致して居ります。喜助、吉原も斯う更けて來ると大層淋しいね。左様でございます、併し旦那、駕籠屋が程好く起きて呉れませうかね。」「サアどうか叩き起したいもののだと、云ひながら歩いて居りましたが「オヤ喜助、何だか乃公アニツチャリ踏んだよ、喜助は振返り、佐野屋の足元を見まして「オヤ、大盡、大變でございます、大方犬の糞でもね踏みあすッたんでございませう、叶ひませんねへ、伊勢屋稻荷に犬の糞、是りア江戸の名物でございませう、一寸お脱ぎなさいまし、私が掃除を仕りませうと、腰なる手拭を取出しまして、中ば引裂き俯向しながら、雪駄の掃除を致して居ります、治郎左衛門はフラー提灯を片手に持つて遣りながら、

熟々之を見て居りましたが、吉原の奉公人杯と云ふ者は、色々な事をせんければならないものだと思ひながら、懐中に入れ置きましたる、羽織をソツと取出し、片手で撥げ、喜助の頭の上から被せて遣りますと、モシ大盛、これは何でございませす、治、乃公の雪駄の掃除賃だ、其羽織は貴様に與てやる、喜、エ、ッ……こりやアどうも難有うございませす、此様な結構な羽織を拜領とは、實に難有いものでございませす、と頭に被りながら、頻りに獅子舞の真似を致しまして、ねへモシ大盛、今頃には此様な事をして居りますと、何だかお化が出たやうでございませすね、治郎左衛門は此一言にムツと致しました、此野郎矢張蔭で乃公の事を、ね化など吐すか、と忽地に怒をあらはしまして、最早後に取返し、斬込まんと思ふ矢先、要らぬ事を言つたものでございませすから、治郎左衛門は

「何を吐すッ」と言ふ一言の終らぬうち、早や一ト腰の柄に手が懸るよと見わたるが、ヤツと懸けたる聲諸共、喜助の首は前にコロリと落ちました、治郎左衛門は片手に提灯、片手に血の滴たる村正を持ち、ハツタとばかりに見つめまして「……」と追がは世に在る時、福島左衛門太輔正則公が戦場に於て、御佩用になつたる丈けあつて、ア、好く研れるなア……」と少時凝視して居りましたが、ム、此上は怨重なる奴輩を、イテ研捨て、呉れんづと、提灯傍に投棄てまして、裾を振げますると腕足になつて其儘に、万字樓の方へ引返して参りました、表の戸をトン、叩きながら「オイ一寸開ける、此處を開けるよ」若者金藏は此聲を聞きまして「誰だ、何誰です、乃公だ、治郎左衛門だ、一寸此處を開ける、金、へ、大盛でございませすか、治、ム、然うだ、金、へ……大盛は今喜助が送ッ

て行きやアがッたが、ア、喜助、馬鹿にするなへ、此間も其
 手で一遍かけやアがッたんだ、大層彼奴は大盛の假癖が旨い、
 驚いて明けて見りやア手前がコッコリ舌を出しやアがッた、
 ヤイ喜助、其んな假癖を使ッても、其手は喫はぬぞ、大方途
 中で大盛から少しお心付けでも貰たナ、ッ好い氣に成やアが
 ヲて馬鹿にして居やアがる、治コリヤ、早く開ける、金エッ何
 のかんのど、併し巧いナア假癖は、ヤイ喜助、其様にお化の
 真似をするど、れ化が傳染るぞ、表では治郎左衛門、益々怒
 を發しまして、何を吐かすか、此奴等造が馬鹿にして、能く
 もお化と吐かしたナと、戸の際に身體をピッカリ寄せまして、
 一刀を大上段に振かぶり、今に開けて見る、と十分に身構へ
 て居ります、金藏はガラリと、入り口を開けまして、金エッ這
 入れ、オイ喜助、馬鹿にしやアがるナ此ン畜生、何處へ隠れ

やアがッた、早く這入れよ、何をして居やアがる」と言ひな
 がら、ソッソと戸口より首を出す所を、待受けた治郎左衛門、
 ヤッど懸けたる一ト階に、首はハツカリ海石際に轉がりまし
 て、胴体は宅内へドンと仆れ込む、其儘治郎左衛門の宅内に
 這入り、片傍の上り口に血刀を置き、戸をシツカリ元の如く
 閉め寄せまして、門を入れ、吻と一ト息をつきながら、ソッリ
 くと表梯子を登ッて参りました、彼の遺手部屋を覗き込ん
 で見ますると、れまさは内に居りません、さては便所にでも
 行ったのであるかと、前なる下足箱に腰打掛け、村正を背後に
 隠して扣へて居ります所へ、れまさは二階へ上ッて参りまし
 たが、此体を見て大きに驚きました、オヤ大尽、貴耶如何な
 すッた、治オ、れまさは、強情はいかんものだねへ、何うしても
 駕籠屋が起きて呉れない、だから又舞戻ッて来たんだよ、と

れ御覽なさいまし貴耶、華魁が便所に行て入らッしやるうちに、ッッとお脱けなすッたんぢやアございませんか、貴耶をお歸し申したと云ッて、華魁に大層叱られましたよ、サア早く奥へ行らッしやい、イヤおまさ、何うも今から奥へ行くのは体裁が悪い、モウ夜の明けるに聞もないから、此儘手前の蚊帳の裡に寝して置いて呉れ、御元談仰しやッちやア不可ませんよ、早く行ッしやい、よウ、御案内を致しますから、治マア好まわナおまさ、汝も斯う顔を見て居ると、モウ老輩だナ、全体幾歳だ、ハイ旦那、モウいけませんよ、五十三でございませ、治ム、……五十三にもなッて遣手婆とは、餘り下さらないね、好い加減に廢めて、何か渡世でもやッたら如何だ、有難うございませ、實はね妾も此年齢まで、此んな奉公をするんぢやアないんでございませが、悪ッて行かうと云ふ子もござ

いませ、何か商賣をしたいと思ひませすが資金は無し、此間もね旦那、芝の露月町に藥湯の株があッたんですよ、いつそ其家を借りて、二階に茶汲女の二人も置いて、營て行ッたら何うだと思ふんでございませが、何分金が無ければ、其渡世もすることがならぬのでございませよ、「ム、幾らばかりあつたら出来るのだ」「ハイ五十兩あッたら、確かに其業が出来るんでございませ」「ハイ、低いものだナ、五十兩ばかりの端下金なら、乃公が出して遣らうか」「オヤマア眞個でございませすかね、万望さうして銀さましたら、誠結搦でございませ、治ム、貸して遣らう、後とも云はず今直に手前に貸して遣らう、併しおまさ、其金は伸金だが可いか」「ハイ何だか知りませんが、通用さへ致しますれば結構でございませ、治ム、買る、たしかに買る、而も拳までは大丈夫、是れだ……ッ」と

背後に隠した村正を、れまさの目の前へグツと突出しました
 「アレー……」とおまさは驚きながら、段梯子を今階下へ
 飛下りんと致します。治郎左衛門「エー何處へ逃げやアがる此女め」と
 ヤツと横に拂ひました一刀に、何かはもって堪るべき、首は
 梯子の半ばに轉がり落ちました。おまさの死骸はドンと仰向
 けに仆れんとして、治郎左衛門の胸の邊りに、斬口が靠れか
 らつて来る奴を、左の手にてヤツと横に打仆しました。白
 上布の帷衣にピツツリ、血汐の掛りましたのは、宛ら半身唐
 くれなる、手を以て其血を拂ひ落しました。顔をベタベタ
 撫でたものと見えました。只さへ怖しきれ化の相貌に、搦て
 加へて血抹れと成りましたので、其怖しさ姿言はん方なし、
 治郎左衛門之小氣味好げに其儘二階傳ひに、奥の廊下の方へ
 ノソリく、と出掛けて行きますと、遙か向ふの方より、上草

履の音が聞かして、何うやら兩人ばかり此方へ出掛けて参
 ります。容子に、見つけられては事面倒と、正面に金網燈籠
 がございます。其下の薄暗黒の處へ身を寄せまして、殿
 ますると、目疾に之を見つましたのは、當樓の華魁喜瀬川松
 山の兩人でございまして、これは客を部屋に寐かして置さま
 して餘り今宵は暑さが殿しく、店の廣間に出掛けんと話しを
 仕ながら是迄遣つて参りましたが「オヤ姐さん、誰か對方の
 燈籠の下へ隠れた者がありませんよ、誰方のお客でありんすか、
 いたづらをしては不可ませんよ」と兩人は側に來りまして「
 モシ貴郎如何なすつたんです、モシ……」と聲を懸けました、
 治郎左衛門之ムツクリ頭を掻きまして「コレ聲を發てるナ、
 静かにしろへ、言はれて兩人は其姿を見て、キヤーンと其處
 へ平太ツて仕舞ひました、治郎左衛門は立上りまして彼の村

正の録先にて「ユリヤ女汝達に罪は無い、疾く此場を立去れ」と指圖をして居ります。先は喜瀬川、後に松山、何分狼狽に廊下へ逃げ歸ります。先に喜瀬川、後に松山、何分狼狽にみましたか、齒の根も合とす、ガク／＼栗ひ、松山は彼の喜瀬川の裾を思はず踏みす、喜瀬川はアツと廊下へ俯向けに倒れました、其上へ松山も重なって倒れます。下になつた喜瀬川と、治郎左衛門に押へられたと思ましたか、アノツた化の大盛、人殺しイ……」と一ト聲懸けたる其聲に、何を吐かすも横手に廻り、力に任して研り下しました、忽地兩人は胴切と相成りまして、四分にあつて四邊はさながら唐くれなる佐野屋は思はず之を見て「フ、フ、フ、要らぬ言を吐しやアがるからだ、アノ心地の好いはど能く研れる」と其儘廊下を奥の方へ進んで参ります。愛に突當りの左手にある

部屋でございませう、これは當家の華魁遠山太夫の部屋にて、今宵は客と俱に臥せて居りましたが、今方の叫聲を聞付け客は大きに驚愕を致して「オイ華魁彼れは何だらう」遠山は耳を敲て「オヤ大盛、大變でありんすよ、大方佐野屋の大盛でありんしやう、必らず此場を動いては不可ないんさませう」と中々此女は氣性の確かり居る女でございまして、直に起き上りまして蚊帳を外して仕舞ひました、次の室に寐て居ります、其身の便ふ禿新造の兩人を起しまして我居間に引入れ、自分ば起て鏡臺の小抽斗より五六挺の燧燭を取出しまして燈火を點け、火箸に突さし、壘の上之を立てます、或は燭を刺して四方に火を燈しましたが、成丈け此座敷は明るくして、中央に四人は坐り込みまして、容子を考へて居ります、所へ治郎左衛門は前を通り掛りましたが、非常に此居間が明

いのでございませうから、ソツと葎障子を閉けまして、血刀を
 携へたまふ、室内へノソリノソリと這入て参りました、客人は
 此体を見てガク／＼と倒れ出しました、遠山太夫は少しも畏
 れず聲を懸けました、オヤ貴郎は佐野屋の大盛ではございま
 せんか、妾は當家の遠山でありんす、必ずすれ間違の無いや
 うに願ひますよ、治郎左衛門は盛にグサと一刀を突込み二王
 立に立上つて、居間の容子を侍々見て居りました、治郎左衛門、
 お前は遠山太夫か、ハイ左様でございませう、遠山、乃公が斯
 様な亂暴を働くのも無理はあるまい、推量して呉れ、御有理
 でございませう、併し大盛、八ッ橋華魁は新たに建てなました
 お座敷の、大方二階に入ッしやるのでありんしやう、ハ、そ
 れは承知だ……併し遠山、少し手前は無心がある、咽喉が満
 いて困るから、水を一パイ飲まして呉れぬか、ハイ今逃げま

百五十

ん、治郎左衛門は尙も進んで奥の方へやつて参りましたが、
 左方にありませう三階造りは是迄で八ッ橋が部屋と致して居
 りました座敷でございまして、其三階には當時新造の勝山が
 居ります、勝手知ッたる治郎左衛門、ノソリノソリと三階
 目掛けて登ッて行きました、勝山は不圖目を覺ましたして、
 枕許にある手燭に燈火を點けまして、便所に行かんと蓆衣の
 儘、廊下に出やうと致しました、折しも、下より誰か上ッて
 参ります、者がございませうから、勝山は聲を掛けまして、オ
 ヤ誰だよ、誰方ですか、上ッて来るのは誰だよ、言ひながら
 透して見て居ります、治郎左衛門は半身血抹れにあり
 まして、手には血刀を提げて居ります、ア、ア……と
 ばかり其場を逃出さんと致しました、飛込んで参りました佐
 野屋は、勝山の背後より唇にしッかり手を掛けまして、やッ

百五十一

す」と言ひながら立上りまして、傍の水屋から水注と湯呑を
 取出し盆の上に載せ湯呑に満々と注ぎまして「サア大盛お飲
 りよ」佐野屋は之れをグツと飲みました。「ア、好い心地だ
 併し遠山、此處はお前の部屋だナ」左様でございませす、皆差
 が使つて居りまする雛妓ばかり、彼仁は妾のれ客でありんす
 治「ム、乃公は再び此部屋へは這入つて来ないから、何處へも
 出ぬやうにして居て呉んな」宜敷うございませす、併し大盛八
 ツ橋と榮さんの二人をば斬つて仕舞ひなませんと主の爲めに
 何にも罪のない者が斬られなまして在らッしやる、其方々が
 浮びませんよ、今から新に建てたる二階座敷へ行きなすか
 宜敷いよ治「オ、親切に言つて呉れた、何條取違がしてなるも
 のか」と再び「ノ、親切に言つて呉れた、何條取違がしてなるも
 遠山大夫の部屋にては誰一人として斬られた者はございませ

と此方へ引据ゑました。治郎左衛門、何處へ逃げる、サアモウ
 叶はぬから覺悟をしろ。ア、大盛、妾は何も知らないん
 ぞますよ、一命ばかりは助けを願ひます、人殺しイ、
 貴ろい聲を發しました。治郎、静にして、汝ア年齒は長か
 いが、口く、口く、喋る奴で、好くも去年より八ッ橋と共
 謀になつてこの治郎左衛門を種々馬鹿にしやアがツた、今
 に恨みある奴は悉く冥途へ遣つてやるんだから、汝の先走り
 に乗込んで行つて、後から追々参ると注進をして置け。と
 言ふより疾く力に任してヤツとばかりに宙に吊りさげますと、
 足は廊下を離れまして、フ、フ、フ、しなからヒイ、叫んで居り
 ます。奴を「今が最期だ觀念しろと、彼の一刀を勝山の左の
 脇腹に當てがひまして、誰も貫れど突貫しますと、何條以
 て堪へるへさや、キヤ、キヤ、と其儘、治郎左衛門の尙も充分に扶

り廻りました、死骸はバツタリ作れる奴を足下に踏まへ「治」
 様ばかりではない、追々跡からやッてやる、ソリヤ是が絶息
 だ、喉元目掛けてグッサと突貫しました、死骸は其場へ蹴飛
 ばし、其儘三階より下へ降りて参りますと、爰に六疊の間
 が二間ばかりございまして、前方の居間に臥して居りますの
 が、彼の番頭新造左橋でございまして、此者も今宵は客がな
 いものと見ゆ、それに此中よりの疲勞が一時に發たものと見
 ゆまして、其身は蚊帳の裡に只一人、好く寐入ッて居ります
 る、治郎左衛門は密と這入ッて行燈の燈火を揺立て、蚊帳の
 釣手を二ヶ所ばかり切ッて捨て、密と隅の方へ押しやりまし
 て、枕邊に突立ちあがり「治」オイ左橋、一寸起きろイ、オイ……」
 と呼起しなから、鉦先にて女の顔邊をベツリく叩きはじ
 めました左橋の不圖目を覺まして是を見るとき、アッとはかり

に驚愕しましたが、アレイと飛起さんとする胸の邊を片足に
 て確り踏付けまして「治」ヤイ左橋治郎左衛門をよもや見忘れは
 致すまい、手前は是迄入ッ橋と申し合はせ、好うもく此乃
 公を馬鹿にしやアがツたナ、また今宵も養生榮之丞を手引を
 したのには手前であらう、サア何事も吐して仕舞へ「ア」大盛
 妾は何事も存じません、萬望お助けなされて下さいまし、人
 殺しイ……」と聲を發てんと致します「治」今更斯
 うなッて助からうとは身怯な奴だ、素より斯様も目に遣ふの
 は得心の上で乃公を馬鹿にしたのであらう、サア今ぞ治郎左
 衛門の恨の一刀、殊には口の軽い貴様の事、寧口中よりヤッ
 て呉れん」鉦先を左橋の口に當てがひまして、根駄板も貫れ
 どいはぬばかり、力に任して突貫しました、何かはもッて堪
 るべき、咽喉より壘に突貫りましたが、手足をヒリく腕さ

ながら、ヒイ／＼悲鳴を發げまして、無慘の最期を遂げました、
 次ぎの居間には新造の船橋、客と蚊帳の裡に寐込んで居りま
 したが、この聲を聞きまして目を覺ました、アツと驚
 愕さまして、逃げんとすれども足は立たず、只戰々慄へまし
 て、頭上より蒲團を被り小さくなつて居ります、所へ治郎
 左衛門は隣の唐紙を開き蚊帳の裡を覗き込みました、釣手
 を切つて蚊帳を引除け、「ヤイ船橋、幾ら貴様が頭を隠しても
 モウ叶はない、尻をオツ立てやアがッて其態は何だ、定めて
 尻から斬れといふのであらう、望みどあらば斬つて呉れん」
 と一刀を大上段に振振りました、船「アレー大盡、万望一命の
 お助け下さいと、蒲團の中から聲を發して居ります、治郎左
 衛門は「何を吐す」と言ふより早く斬り下す一刀の許に忽身
 体は胴斬りと相成りまして、血煙諸共眞兩断に斬り捨てられ

ました、所が片傍に寐て居りました客人でございます、この
 物音に目を開きますと、斯る騒動でございませうから、何
 う途惑ひ致しましたか、飛起きますなり、治郎左衛門目掛け
 「ヤイ何をしやアがる」と行成り掴みかゝつて参りました、治
 郎左衛門は「エーッ坊げをするナ」と片手上段に振被りました
 て、肩先より乳の下にかけ、ヤッど一ト聲諸共に、身体は袈
 裟切りとなつて相果てました、實に此客は災難もとでござ
 いました、別に恨も何もございませぬが、團らす今宵此機に
 来合せたばかりで治郎左衛門の一刀の爲めに遂に敢果なく息
 の絶はました、佐野屋は愕然打笑ひ、此上からは新に建てた
 る彼の三階、イチャ乗込んで呉れんど、二階から下へ降りま
 して長廊下を奥の方へノソリ〜と出掛けます。

第九回

然るに爰に彼の三階造りの二階の一室にて八ッ橋は寶生榮之丞と對座になり、最前より酒宴をして居りましたが、遣手のおまさか参りまして、只今治郎左衛門が歸つて行つたなどの事を承はりまして、大きに驚き、早速己が部屋に來たり、禿の繁路を起こして段々尋ねますると、只何事も知らぬとの事ゆゑ、大きに立腹を致しまして、繁路を叱付け、漸う蚊帳も蒲團も二階へ運ばせまして、早々此處に寐床をのべ、遣手をはじめ皆々を返して仕舞ひ「ハア榮さん、今夜はモウ大太夫だよ、併し妾も此中からの心配で大變疲勞が發たんでありますから、何れ委しい話もありんすが、其話は明日の事として、今晚は何も言はないで、モウ寐なまし」と其儘寐所に就きました、八ッ橋は何分治郎左衛門の側で厭な動をして居りました、其疲勞が一時に發ましたか、寐所に就くと其儘に、前

后も知らず寢込んで仕舞ひました、榮之丞は久々に八ッ橋に出會ひましたと云ふ、今宵は何かと話も致したいと思ひますが、肝腎の八ッ橋が好き寝入りするものでありますから、その身は枕許にありませぬ、莫益を引寄せまして、一服喫みながら座敷の普請の様を熟々寢所の裡より打眺め、道は治郎左衛門だ、金子のあるに任しやアがって、随分普請も立派なだねへ、この蚊帳一張でも中々安眠くと出来ぬ、白絹の蚊帳に秋の七草の模様、加之に四方の環が銀無垢とい、アモ素敵な事をしやアがったものだ、ト熟々四邊を見廻して居りました、が、深夜のよとして四邊も寂寞、折柄遠くに人聲して「ア、レ、お化の大盡、人殺しイ」といふ聲が幽に此の座敷へ漏れ聞ゆる、オヤ何だらう」と耳を傾け「アッ」と伺ひ居りました、が、一こりやア事によるとお化が舞ひ戻つて來た

んちやアあるまいか、何しろ泣叫ぶ彼の聲は……」と考へ居
 りまするそのうちに、次第に聲も近寄り、何やらこの座敷の
 方へ足音を早めて来る様子、さてはと驚く衆之丞「オィ、
 花魁、オィ……一寸起きる、何だか變だせ、何うやらお化が
 亂暴でもして居る様子だ、一寸起きな」と頭を揺起して居り
 ますが、八ッ橋の充分に寝込みましたか、宛然死人同様で
 さいまして、何うしても起きません、其内次第に足音も近寄
 る様子も、突然寮間より飛出しましたが、到底階下へ降り
 て行く譯にはならず、據かぐ次の六疊の間に密と遁入り込み
 ましたが、傍にある夜具入を是僥倖と引開けまして、その中
 へ忍込みまする、間もなく階下より血刀引揚げ、治郎左衛門
 はソソリくと上りこんで来ました、行燈を片脇の隅の方へ
 寄せ、少し燈火を揺立てまして、蚊帳の二方の釣手を切つて

落しました、その中を覗き込んで見ますと、此は如何に八
 ツ橋ばかりが臥して居ります、治郎左衛門は此体を見て治
 「失策ッた、ふ、ふ……さては榮之丞奴は何處へ逃げやアがッ
 たナ、折角此處まで乗込んで彼奴を逃すとは残念」と尙も四
 邊を見廻して居りますと、今一がた煙艸を喫んだその煙が座
 敷の内に朦朧と致して居ります、殊には側の蒲團の上に未だ
 暖氣もありますから、さては何うやら此邊に隠れて居やアが
 るに違ひない、先女の方から片付けてやらうと、側に寄添ひ
 治「オイ華魁、一寸起きて呉んナ、オイ八ッ橋、起きろ」ど頷
 りに呼起して居ります、八ッ橋は只夢中にて「アレマアお止
 りよ榮さん、今宵は不可ないと言ったぢやないか、お前も知
 ったの通りお化の側で種々に辛い勤めをしたんだよ、話があ
 れば何事も明日の事として、何卒今晚は寐かしてお呉れよと

言ふかと思へばまたスヤ／＼寐込みます様子、治郎左衛門は此言を聞き、憤然と怒を催しました「ヤイ何だ、お化の側で辛い勤めをした、夫れはど厭な勤めなら強てしんど頼みはしねへ、是からの勤めがモウ一ツゑいんだ、何うしても手前は起きられねへナ、好し、夫程眠たくば斯うして起きてやらう」と彼の村正の鉢先にて八ッ橋が横に寐て居ります左の頬に當がひまして鉢先二三分突込みました、何様お寐坊でも是ぢやア忽目を覺えます、お疑ひなれば諸君はお行りさつて試して御覽、八ッ橋とキヤツと聲を發げまして、目を開いて見ますと、治郎左衛門は枕邊に仁王立ちに相成寐て居ります「アレマア佐野屋の大盡ぢやアございませんか、何故斯様な事をなさいました、頬よりメラ／＼血を流して頬に苦しみ様子でございますから」治「オイ八ッ橋、榮之丞は何處へ行

つた「何と仰しやいます、妾は其様なとは知らぬいんざますよ」治「黙れ、知らない奴が今此處に何故手前と寐てゐやアがった、而もこの枕は誰がして居たんだ、それを吐せ」八「エ、大盡、貴郎は未だ疑ふて居らッしやいますか、先刻妾が便所へ行て居る間に、主が歸りなましたから、淋しくてならないんざます、それゆゑ左橋を側へ寐かしてゐいたんざいます、大方左橋は只今便所へ行つたんざいませう、妾は痛くつて堪りません」とワイ／＼泣出しました「黙れ、此期に至つて幾ら胡化さうと思つても然うは行かない、便所へ行つたと吐した左橋は、今頃は三途の川で待つて居るだらう、乃公の姿を見るイ、左橋ばかりぢやアない、船橋、勝山を首めとして、此室へ来るまでに悉く殺して來たのが解らないか、好うも人を馬鹿にしやアがる、覺悟をしろイ」と言ひながら、彼の村正の

一刀を片手上段に振振りまいた、八ッ橋はモウ是迄なりと
 アレ一人殺し「と聲を發てながら逃出さうと致します
 るを「エ、この女奴、何處へ逃げる」とヤツと掛けたる聲
 共、忽ち八ッ橋の左の片足、スバリーッ斬落しました、キヤ
 ッと其擡へ仆れました、何分女の悲さ逃げるとも能ひません、
 一寸私は講談半ばに諸君に申し上げますが、此言は眞に不都
 合でございまして、女の悲さ逃げるとも能ひない、其様なら
 野郎なら逃げられるかと、諸君は仰せらるゝでございませう
 が、必ず野郎でございませうれば〇〇が手傳つて逃げませう
 と思ひます、正然うでもございませう、餘事は借置き八ッ
 橋はヒイ〜と聲を發げますも頓着なく、巻を掴んで元の所
 へ引据ゑました「ヤイ八ッ橋、是から向だ〜此位ゐな苦痛
 では捨て置かない、充分に苦しめてやるんだ」又候同く右の

片手を斬つて落しました、何をいふにも片手に片足、只ヒイ
 〜と叫ぶのみ「サア是からよもや逃げられまい、八ッ橋、
 汝が斯ういふ苦みをするのも心からだ、好くも〜昨年から
 此治郎左衛門を馬鹿にしやアがツたなア、汝ア昨日馳書使ひ
 の喜助に附付け榮之丞の許へ送ツた手紙に、兩三日の其内に
 土手で必ず待伏せしめてお化を退治て呉れると、筆に任せて、
 好くも〜生意氣なとを書きやアがツたなア、人の恨みはあ
 るものかないものか、彼の手紙を見た際の、乃公の胸の中の
 苦しき切なさは、何の様にあると思ふ、家を捨て我身を捨て
 るの恨晴らした、今に榮之丞も充分に弄殺しにしてやるんだ、
 思ひ知れよと、胸先より背骨にかけて突貫しました、その一
 刀に七轉八倒、ヒイ〜と聲を發げて居ります、治郎左衛
 門のさも心地好さうに側に坐り込み、煙脚盆を引寄せまし

て、スツバくど、煙艸を喫みながら、四邊にキヨロく眼を配ッて、ヤイ榮之丞、此處へ出る、出て来い、現在二世と交した貴様の女房が斯る最期の苦痛みに出るところが出来ぬへか、腰振奴、汝今年の十月に吐した事と忘れはすまい、野州の土百姓の腕前と今ぞ見せてやるんだ、其節汝も小野派一刀流とか吐して自慢をさらしたのを忘れたか、逃げ隠れをせずと、性根があらば此處へ出て来い、何時でも相手になつてやる、頼に悪口を致して居ります、押入の中で聞いて居りましたる榮之丞、無念の切齒を致しましたが、今此處に腰の物があつたら、敵はぬまでも彼奴と勝負に及んで呉れるものと、不圖押入の隅を眺めますると、宵に此處に上りましたる際、新造左衛門が此處へ納つておいたものと見ゆ、棚の横手にあります一刀、是幸ひと密と押入を音のせぬ様に開けまして、出る

と等しく下緒を取つて襷となし、一刀をスツリと引抜き、振足差足、次の間の様子を覗き込んで見ますと、治郎左衛門は對方へ向いて八ッ橋の苦痛む態をさも心地好げに眺めて居ります、背後の方より榮之丞、「ヤイお化、覺悟をしる」と言ふより早く頭上より斬下したる彼の一刀、大抵の者なら真兩断ともなりまする所、切差孫磨の功を積みし治郎左衛門の腕前、ヒョリと膝を躓はしめると、榮之丞の一刀、宙を望んで斬込みました、「何をさらす」と言ふより早く、前なる煙艸盆をオツ取り、榮之丞を目掛けて目濱に投げつけました、此方は膝を躓はす其内に、盤に突差しおいたる村正を取るより早く身を擲へに及び、「サア来い」と敵ひました、今は榮之丞も一生懸命に切込ひ大刀風、心得たりと右に拂ひ左に外し、七八合打合ひました、怒つて下す治郎左衛門の鋒先過まらず、賢生

の左の肩口へ二寸ばかり切込みました、何かは以て堪るべき、
 アツと其場へ打倒れました、治郎左衛門は仕済したりと、
 之の丞の一刀持ちし片腕と、胸の邊を片足にて確とばかりに踏
 付けました、治サア榮之丞、動いて見るエ、何うだ、是からと
 一ト思ひに殺さぬぞ、充分汝をも苦めてやるんだ、好うも治
 郎左衛門を馬鹿にしやアがった、其恨みはこの通りと、榮之
 丞の腹を望んでチリく、一刀を突込みまして抉り廻します
 る、道の榮之丞も只七轉八倒、手足を腕いて苦みまするを、
 漸う此方へ飛退きまして、二人共に充分に苦めてやるんだ、
 乃公は其間一寸一服だ、と二三服煙艸を喫みまして、寢所に
 あつたる水呑を取り漸う一口飲み干し咽喉を濡しましたが、
 モウ拂曉にも間もあるまい、イチャ引導を渡して呉れんど、
 遂に二人の首を其所へ切つて落しました、側の床の間へ首

を飾り附けまして、此上からの當家の主人重兵衛も、此儘に
 指くべきやと、刀を携へ、此座敷を後に下を望んで降りて参
 りました、兼て奥座敷に臥して居りました、當家の主人重
 兵衛夫婦の居間を覗き込んで見ますと、蚊帳は釣りてあれ
 ども二階の願に、中には夫婦共に腕の亮や空蟬の、何處へ逃
 げましたか更に行方が知れませんが、扱は最早風を喰つて逃
 でしか、チエー残念なりと、押入其他所々方々、彼方此方を
 明放ち、探廻れど更に行方が知れませんが、治郎左衛門は櫛端
 に突立って、願に四邊を伺ひますと、廻り廊下の對方の端
 に上雪隠がありまする、然るに此は不思議なるかな、その雪
 隠の戸がガタ／＼動いて居ります、これは全く當家の夫婦
 が中へ忍込んで慄々居るものと見えます、治、一さては雪
 隠だナ、とノソリ／＼と進んで参りました、戸の外に突立ち

まして、ヤツと掛けたる辟諸共、一刀をグツと突貫しませる
ど、内ではキヤツと聲を發けました、治郎左衛門は一刀を引
抜くより早く戸を開きて見ますと、肩口より胸先かけて突
貫されました、禪一ツの丸裸体にて主人重兵衛は其所へ作り込
みました、治郎左衛門は警を擱んで引上げあがら、ヤイ重兵
衛、好くもく、是迄この治郎左衛門を八ッ橋と共謀の上馬鹿
にさらした、今を思ひ知つたるか」と左の脇腹より拳も貫れ
ど右の肩へ突貫し抉り廻して居ります、只重兵衛はヒイ
と泣叫ぶのみ、治郎左衛門は不圖様端より園を覗込んで見ま
すると、紅躑躅の花壇がございまして、その中に一人の女が
寝衣の儘で大地に縮まりまして、ガマ／＼裸うて居ります、
ヤイ、其所にゐるは誰だ、何奴だ」と早々園へ飛降りました
はな「ア、一命ばかりはお助け下さいまし」と言ひつゝ

逃出さうと致しました、好く／＼見れば重兵衛の家内お花で
ございます、オ、汝ア當家の家内か、良人と共に冥途へ行け、
汝は斯うして呉れる」といふより早く打下す一刀、何かは以
て堪るべき、難なく首は其場へコロガリ落ちました、之れを
引提げ椽側へ立戻り「サア重兵衛、偏見恨のない様だ、嫌ア
諸共冥途へ行けど、此處に至って主人の首を打落とし、二個
の首は是又下の床の間に飾り置き、刀の血汐を拭ひ鞘に納め、
店の間へ出掛けて参りました、纏て門を外して戸をガラ
リと引開け、戸外の方へ出掛けました、最早東白みの頃は
ひ、その身はス／＼仲の町の彼の蔦屋佐治兵衛の戸外まで
やゝて参りましたが、當家は未だ夜中の夢、四邊は寂々と致
して居ります。

第十回

治郎左衛門は表の戸をトン／＼と叩きまして「ヤイ一寸開ける、開けるよ」トン／＼と頻りに叩いて居ります、其店の間に蚊帳を釣って寐て居りましたのは吉原の無頼漢でございまして、彼の田町に住居をする岩五郎に峠吉といふ二人の若者、此者は八ッ橋の番頭新造左衛門、船橋の情夫でございませうが、夜前ば彼の治郎左衛門の催しなる大騒ぎにて、二人は遅ふともあらず、夫れゆる夜更けに及びまして當家を頼んで泊めて貰ひました、好く寐入り込んで居りましたが、此音を聞きつけまして岩五郎は不圖目を覺まし「ヤイ峠、一寸起きろ、何だか表を叩いて居る奴がある、起きて呉れよ」峠、堪忍して呉れる、中々目は開きやアしねへ」また夫れあり寐て仕舞ひました、戸外の方には治郎左衛門「ヤイ早く開ける、早く開けねへか……」呼起こされて岩五郎「チロツ、エー一面倒

臭いなア、今頃誰だイ治「イヤ誰でもない治郎左衛門だ、一寸開けて呉れ」エーッ大變朝早くから歸つて来やアがッて……「ヤイ、只今開けますよ」目を擦りながら蚊帳を出まして、禪一ツの徳庭へ降りまして門を外しガツリと開けました、戸外と明るくなつて居りますから、目をバチ／＼させながら「大騒ぎ、大騒ぎ、早くございませぬへ」と言ひながら治郎左衛門の姿を見て、アツと驚き逃げんとする奴を、峠發てさしては相成らんと、宅内へ飛込むが早い、横に拂つた一刀にて、忽ち岩五郎の首は前にどコロガリ落ちました、胴はバツタリ片傍に倒れ出した、此物音に峠吉は目を覺ました、其内に治郎左衛門は入口を締め以前の通りに門を入れました、峠吉は蚊帳の中に在つて「ヤイ岩、何だ今のは、バツタリ音がしたのは何うかしたのか」不圖庭を眺めまして「岩、如何

に眠いからって其様な處へ寐る奴があるかい……オヤ、
だねへ、手前首は何うした」と不圖見る對方の方に血抹れに
なつた治郎左衛門の姿「ヤァー大變だ」と驚きながら蚊帳の
中へ飛込みまして、頭から蒲團を被らんとする奴を、飛込ん
で来ました治郎左衛門、蚊帳越しに拳も貫れど突貫しました、
此者も一突にて其儘息は絶へました、是等の者に目も掛
けず、血刀を引提げ、ノッリくと奥の方へ出掛けて参ります
ると、椽端の兩戸を開けた儘座敷に蚊帳を釣つて佐治兵衛お
なかの兩人と好く寐入つて居りますのが、戸外の明で明々と
蚊帳の内は好く見透して居ります、ななかは枕を側へやり
まして眞仰向けに相成り腰巻一ツで宛然蜘蛛を踏付けたる如
く、他愛もなく寐込んで居ります、治郎左衛門は密と蚊帳
をめぐり、物をも言はず、おなかの髪に手を掛けまして、其

儘二三間臺所の方へズル、引立て参りました、何程好く寐
て居ります者でも是には敵ひません、目を覺して大きに驚
きました、が「アレマア誰だよ、アレー……」と聲を發て居
ります、するうちに、おなかの脊中に馬乗りに打跨りまして、
グツと押へながら「ヤァーおな、誰でもない治郎左衛門だ、
是迄で八ッ橋の事に就いて色々と汝が親切に周旋して呉れた
る其返禮は此通り」と起しも立てず其儘に、脊中の眞中央へ
彼の一刀をわてがひグツと突込みました、尙も兩手を掛け力
に任せてムーン、何かは以て堪るべき、腹へ貫つて刺へ盛か
ら臥板まで突貫り、宛然一刀は窮際まで突通りました、おな
かはキヤーツと手足を腕いて七轉八倒、治郎左衛門は尙もチ
ツと押へ付けまして「大きな聲を發てるナ、少時の間の我浸
だから辛抱しろイ」と柄を持って袂り廻して居ります、此物

音を聞き付け目を驚したる當家の主人佐治兵衛でございますが、此奴は俗に言ふ結構人とやら申しまして、何事も當家の世帯廻りは一切おなかに任せてございます、極く世事に迂い奴でございませうが、今女房の苦んで居ります有様を見まして、非常に驚き、寐間の中より兩手を合せガク／＼慄へながら、佐モ、モ、モ、佐野屋の旦那様でございますか、おなかが何を悪いを致しましたか、オ、お腹も立ちませうが万望、命ばかりはお助けを願ひます、治、ヤ、佐治兵衛、一寸起きて呉る、手前は何か知らない奴だから、汝を殺さうとは言えぬ、併し乃公は昨夜から餓さづめだ、腹が空って堪らなから、一寸起きて茶を沸して飯を喰ふ支度をして呉れる、治、オ、宜敷うございませう、直にお進め申しますが、ド、万望、モ、シ、女房のおなかはお助けなすって下さいませ、……ア、ア、ア、

いとをなさいましたな、此様なに血が出てございませう、モ、シ、……アレ彼様なに手足を腕いて居ります、何卒お助けを願ひます、言ひながら、寐間からノック／＼出掛けて参りました、佐治兵衛は慄へながら、治、郎左衛門の側を通りまして庭へ降り、臺所におりませうと、輪を上口へ持って参りまして、焚火を取出し中へ投れ、消炭を上に乗せまして湯沸に水を入れ、道具を持って参り、カチ／＼火を打ちながら、佐、モ、シ、旦那、万望、後生でございませうから、如何様な悪いとがあるかは存じませんが、おなかの悪い事は、幾重にもお詫を致します、何卒助けてやッて下さいませ、万、一、や、其、女、が、殺、さ、れ、ま、し、た、ら、私、の、宅、は、闇、黒、で、ご、さ、い、ま、す、何、も、角、も、其、女、が、引、受、け、て、居、り、ま、す、万、望、モ、シ、旦那、オ、お、助、け、を、願、ひ、ま、す、治、ヤ、イ、何、を、し、て、居、や、ア、が、る、ん、だ、其、様、な、事、を、し、て、火、が、發、る、か、火、口、を、附、け、る

イッ、未れを忘れて居りました」漸う火口を附けまして火
 を打出し、附木に移して焚附に燃し附けました、然出しまし
 たうへ湯沸を掛けまして、濺圍扇を持つてバツ／＼扇ぎな
 がら「万望後生でございませ、旦那様助けてやッてお呉んな
 さいませ、モン此通りでございませ」と鳥羽繪の様な腰付き
 を致しまして、頬に瀾いで居りますうちに、治郎左衛門は
 柄の所へ手を掛けおなかの腕いて居りますのをさも心地好
 さううに打眺めて居りましたが「治郎左衛門、手前と大層好
 嬢アを大事に思ふがナ、此様な悪黨女を生かしておくと此後
 も貴様の方へ遊びに来る客人達が何程迷惑するか知れない、
 此女ばかりが女ぢやアあるまい、跡へまた氣に入ッた嬢アを
 娶ッて商賣しろイ、そりや之れを見ろイ、この通りだ」と突
 貫してあるのを少し振きまして見せてやります、佐治兵衛

は「ヤ、ッ酷いことをなさいました、さては脊中からハ、腹へ
 貫ッて居りますのか、是程までには願ひ申しても、何うあッ
 ても嬢アは助かりませんか、エ、ッモ、ウ顔まない、嬢ア
 の敵だ覺悟をしやアがれ」と今彼の湯沸が少し沸いて参りま
 したのを取るより早く治郎左衛門を目掛けまして投付ける心
 得ではございませが、氣が轉倒いたして居りますから、力
 に任して上へ投りあげました、關居に當ッて下へ落ちて参り
 ました奴を、己と己が手に少し沸きかけました湯を頭から浴
 びました「ア、熱い／＼」治郎左衛門は回顧りまして「ヤ、佐
 治兵衛、何をさらす、さては抗抵をしやうといふのだナ、ム
 、其氣あれば汝も助けてたかない」とおなかの脊中に馬乗り
 になッて居りましたが、其儘飛降りるよと見せしが、彼の一
 刀を取ッて力に任して打下ろしましたのが佐治兵衛の右の肩

より脇腹へ掛けて袈裟掛けに斬込みました、身は真兩断に相
 成りまして二言もなく其場へ打倒れました、治郎「見やがれ馬
 鹿野郎、汝は助けてやらうと思ふのに汝から求めて自滅やア
 がるんだ」と傍に落ちて居ります彼の湯沸を取り、厨下に来
 まして少し水を入れ、以前の所へ掛けまして、バヤク／＼
 附けました、聽て臺所を探しまして、漸う飯櫃と茶碗を持
 ツて参りました、鼠不入から出し、殘りの澤庵と取出し、
 刀を突貫し、其場へ坐つて徐々と喰ひはじめましたが、随分
 大膽な男でございます、然るに當家の飯炊き嘉助といへる老
 爺は最前より寢床に在りましてこれを聞いて居りました、
 さては治郎左衛門といへる人が、旦那も家婦さんも殺しやア
 がつたものと見ゆる、且密と立上りまして、庭の隅にござい
 ます用心棒を引揚げ、足音と忍んで治郎左衛門の背後へ廻ッ

て参りました、左右を見ますと、ねなか、佐治兵衛の死骸、
 其上治郎左衛門は血抹になつて居りますから、其態を見ます
 ると、彼の用心棒を振振りました儘、ガ／＼と慄へて居り
 ます、治郎左衛門の不圖背後へ回顧く途端、旦那の敵だ、覺
 悟をしろイ」と打ち下ろします、ヒラリと牀を察しました
 る治郎左衛門、嘉助は手先が狂ひましたか、飯櫃の中央を強
 に打擲ります、櫃は破れまして四邊は宛然飯だらけ、何を
 さらす」といふより早く一刀を取りまして背後突きに突さま
 する、嘉助は胸板から脊骨へかけて一ト貫し、キヤツと其
 場へ座りました、飛掛つて絶息の一刀「ハ、ハ、ハ、無益の殺生
 したワイ」とまたも座つて心静に軽く三ハイ食事を致し、一
 を提げ庭に降りまして手桶を傍に据ゑ、二杯の水を汲み、
 其身の跡に染いて居ります血汐を洗落し、村正の刀の柄は血

でエラツイテ居りますから、それを洗落し、百八十二一刀を水で冷し
まして、着て居る衣類の兩袖を遂に引裂ッて仕舞ひました、
帯締め直して裾端折上げ、此上は阿波太夫方へ乗込んど、表
の間へ出掛けて参り門を外して戸を開けますと、往來には黒
山の人群集、是は吉原の若者或は無頼漢、其他吉原裏田浦よ
り彼の車善七の子分の奴輩、今此處へ集りましたばかりと見
ゆ、各自に獵物を携へまして、只喧々ど聲を發するとのみで
近寄る者は更にございません、治郎左衛門と左右に眼を配り、
チツと容子を見澄ましたが、役人休の者は一人として居りま
せんから、治、ヤイ、手前等は何をしやアがる、要らぬとに生意
氣に手出しをすれば一命がないぞ、妨げするナ、と一刀を振
振りながら往來の中へ飛出しました、そりや出たといふより
早く八方へ蜘蛛の子散らす如く逃出します、治郎左衛門は

角町の方へドシ／＼と是等の鎧々を追うて参りますると、背
後に控へた大勢の者は、ソレれ化を殺して仕舞へど、後より
ホチ／＼追掛けます、治郎左衛門は時々背後へ願回ります
と、そりや化が此方へ來ると逃げますから、前へ行けば
後から追掛ける、何の事もない飯の上の鯛を追ふ様なもの
ございまして、側へ近寄りませんで、只喧々ど聲を揚げる
とのみでございます。

第十一回

所か吉原の混雑は、實に一方ならざる騒動でございまして、
昨夜は五月の節句でございませうから、多くの人が吉原へ入込
んで居ります、それも今朝夜の引明けに早く歸つた者は宜し
いが、未練らしく夜が明けましても、暇を入れたる者共は、
最早この騒動となりまして、御役人の御出張になるまでは、

大門を開切つて仕舞ひましたから、中々以て出る事は出来ません。○「モシ鳥渡この大門を御開け下さいまし、昨夜は用事に仮托しまして、宅を飛び出しましたので、遅く歸りますと大變でございます。門番「開けないよ、御役人の御出張になるまで、斯かる大願動だから、逆も開けるとい出来ない。△「モシ私は主人持ちでございまして、昨晩来る時に少しばかり小僧に小費を遣つて、今朝主人の寐て居ますうちに、歸りたいと思ひましたのが、ツイ斯様な次第で出る事も出来ません、遅くなりませす時は、親方を失策りますから、何うかお開けなすつて下さいまし。○「モシ、何卒後生でございませすから、切めてこの老爺などお出しなされて下さいまし、孫の手前が面目次第もございません、昨晩之親類にお講が勤まりましたので、其處へ行くと言つて胡魔化して宅を出掛けましたので、當年

は六十三歳でございませす」種々な奴が大門に集りまして、出やうと致しませするが、中々出しません、その上大門の外では、何でも門内へ這入つて、この様子を見たいと、ドン／＼門を叩きまして「ヤイ此處開ける」と囁鳴つて居ります。間もなく此處へ出張いたしましたる役人は、八丁堀にて盜賊方生田重助、山田三五の兩人でございませす、十人ばかりの捕卒を伴れまして、これの別段治郎左衛門の捕方に向つたのでございませんが、今朝早天より田町の方に何か調べの筋があつて出掛けて参りました。圖らず治郎左衛門が亂暴と云ふ事を承りまして、相手は高の知れたる町人も、敢て吾々の掛りの場所ではないが、乗込んで行つて召捕つてやらうと、それゆゑ此處まで駆着け来りましたので、大門を打叩きまして「此處開ける、御用だ」ッ御役人の御出張と、早速大門